

千葉県八千代市

市内遺跡発掘調査報告書

仲西遺跡 a 地点
勝田大作遺跡 b 地点
麦丸遺跡 i 地点
川崎山遺跡 r 地点
内野南遺跡 f 地点
内野南遺跡 g 地点
小板橋遺跡 f 地点
持田遺跡 d 地点
新東原遺跡 k 地点
堰場台遺跡 a 地点
北裏畑遺跡 e 地点
上高野白幡遺跡 a 地点
新東原遺跡 l 地点

平成 25 年度

八千代市教育委員会

凡 例

1. 本書は、八千代市教育委員会が平成24年度市内遺跡発掘調査事業として、国庫及び県費の補助を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。報告書作成作業は、平成25年度事業として行った。
2. 本書に収録した発掘調査は、以下のとおりである。

No	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因	調査担当
1	仲西遺跡 a 地点	八千代台西十丁目521番24の一部	平成24年4月17日～平成24年4月18日	6㎡/50㎡	個人住宅	宮澤久史
2	勝田大作遺跡 b 地点	勝田637番2	平成24年4月20日～平成24年5月9日	280㎡/2,975㎡	宅地造成	宮澤久史
3	麦丸遺跡 i 地点	大和田新田字麦丸台640番2・14	平成24年5月11日～平成24年5月24日	156.8㎡/1,319.13㎡	宅地造成	宮澤久史
4	川崎山遺跡 r 地点	萱田字中台2256-22	平成24年6月12日～平成24年6月14日	20㎡/200㎡	宅地造成	宮澤久史
5	内野南遺跡 f 地点	吉橋字内野1072	平成24年7月5日～平成24年8月8日	1,064㎡/10,790㎡	倉庫建設	宮澤久史
6	内野南遺跡 g 地点	吉橋字内野1076-1ほか	平成24年8月10日～平成24年8月29日	341㎡/4,428㎡	工場建設	宮澤久史
7	小板橋遺跡 f 地点	大和田字台田道230-33・38の各一部	平成24年9月4日～平成24年9月10日	30㎡/277.38㎡	宅地造成	常松成人
8	持田遺跡 d 地点	村上字松葉1189-2ほか	平成24年9月6日～平成24年9月18日	100㎡/1,470.14㎡	宅地造成	宮澤久史
9	新東原遺跡 k 地点	勝田字新東原1291-4	平成24年11月7日～平成24年11月15日	78㎡/777.5㎡	宅地造成	常松成人
10	堰場台遺跡 a 地点	大和田字堰場台283番1, 字堀込250番9	平成24年12月26日～平成25年1月21日	729㎡/7,806.27㎡	宅地造成	宮澤久史
11	北裏畑遺跡 e 地点	萱田町字萱田道798-4・6・7	平成25年1月18日～平成25年1月25日	44㎡/411㎡	宅地造成	常松成人
12	上高野白幡遺跡 a 地点	上高野字柴栗708番2・3・4	平成25年3月14日～平成25年3月26日	450㎡/6,551㎡	太陽光パネル設置	宮澤久史
13	新東原遺跡 l (エル) 地点	勝田字新東原1247番21	平成25年3月18日～平成25年3月21日	30㎡/335.9㎡	個人住宅	常松成人

3. 本文等で用いた記号（アルファベット）は、以下のとおりである。

G グリッド M 溝跡 T トレンチ

4. 土層説明・出土遺物で用いた砂・礫の表記と大きさの関係については、土壌学及び国際法の基準に従い、以下のとおりである（単位：mm、礫の大きさは長径）。

巨礫300～200, 大礫 200～100, 中礫100～50, 小礫50～10, 細礫10～2, 粗砂 2～0.2, 細砂0.2～0.02

5. 出土した遺物のほか、写真・図面等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。
6. 本書の図版作成は、常松成人・山下千代子が行い、遺物写真撮影・編集・執筆は常松が担当した。

目 次

凡例

目次

挿図目次

表目次 写真図版目次

I 調査に至る経緯	1
II 各調査の概要	
1. 仲西遺跡 a 地点	5
2. 勝田大作遺跡 b 地点	7
3. 麦丸遺跡 i 地点	11
4. 川崎山遺跡 r 地点	14
5. 内野南遺跡 f 地点	17
6. 内野南遺跡 g 地点	21
7. 小板橋遺跡 f 地点	23
8. 持田遺跡 d 地点	26
9. 新東原遺跡 k 地点	31
10. 堰場台遺跡 a 地点	34
11. 北裏畑遺跡 e 地点	38
12. 上高野白幡遺跡 a 地点	41
13. 新東原遺跡 l (エル) 地点	44
報告書抄録	46

挿図目次

第1図 平成24年度調査市内遺跡位置図	3
第2図 仲西遺跡 a 地点位置図	5
第3図 仲西遺跡 a 地点トレンチ実測図	6
第4図 勝田大作遺跡 b 地点位置図	7
第5図 勝田大作遺跡 b 地点トレンチ実測図	8
第6図 勝田大作遺跡 b 地点出土遺物	9
第7図 麦丸遺跡 i 地点位置図	11
第8図 麦丸遺跡 i 地点トレンチ実測図	12
第9図 麦丸遺跡 i 地点出土遺物	12
第10図 川崎山遺跡 r 地点・北裏畑遺跡 e 地点 位置図	14
第11図 川崎山遺跡 r 地点トレンチ実測図	15
第12図 川崎山遺跡 r 地点出土遺物	15
第13図 内野南遺跡 f 地点・g 地点位置図	17
第14図 内野南遺跡 f 地点トレンチ実測図	18
第15図 内野南遺跡 f 地点出土遺物	19
第16図 内野南遺跡 g 地点トレンチ実測図	21
第17図 小板橋遺跡 f 地点・堰場台遺跡 a 地点 位置図	23
第18図 小板橋遺跡 f 地点トレンチ実測図	24
第19図 小板橋遺跡 f 地点出土遺物	24
第20図 持田遺跡 d 地点位置図	26
第21図 持田遺跡 d 地点トレンチ実測図	27
第22図 持田遺跡 d 地点出土遺物 (1)	27
第23図 持田遺跡 d 地点出土遺物 (2)	28
第24図 新東原遺跡 k 地点・l 地点位置図	31
第25図 新東原遺跡 k 地点トレンチ実測図	32
第26図 堰場台遺跡 a 地点トレンチ実測図	35
第27図 堰場台遺跡 a 地点出土遺物	36
第28図 北裏畑遺跡 e 地点トレンチ実測図	39
第29図 北裏畑遺跡 e 地点出土遺物	39
第30図 上高野白幡遺跡 a 地点位置図	41
第31図 上高野白幡遺跡 a 地点トレンチ実測図	42
第32図 新東原遺跡 l 地点トレンチ実測図	44

表目次

第1表	勝田大作遺跡 b 地点出土遺物	9	第5表	小板橋遺跡 f 地点出土遺物	24
第2表	麦丸遺跡 i 地点出土遺物	12	第6表	持田遺跡 d 地点出土遺物	28
第3表	川崎山遺跡 r 地点出土遺物	15	第7表	堰場台遺跡 a 地点出土遺物	36
第4表	内野南遺跡 f 地点出土遺物	19	第8表	北裏畑遺跡 e 地点出土遺物	39

写真図版目次

図版1	仲西遺跡 a 地点	6	図版9	持田遺跡 d 地点 (2)	30
図版2	勝田大作遺跡 b 地点	10	図版10	新東原遺跡 k 地点	33
図版3	麦丸遺跡 i 地点	13	図版11	堰場台遺跡 a 地点 (1)	36
図版4	川崎山遺跡 r 地点	16	図版12	堰場台遺跡 a 地点 (2)	37
図版5	内野南遺跡 f 地点	20	図版13	北裏畑遺跡 e 地点	40
図版6	内野南遺跡 g 地点	22	図版14	上高野白幡遺跡 a 地点	43
図版7	小板橋遺跡 f 地点	25	図版15	新東原遺跡 l 地点	45
図版8	持田遺跡 d 地点 (1)	29			

I 調査に至る経緯

八千代市は、首都圏のベッドタウンとして開発が進み、平成8年4月の東葉高速鉄道の開業以来、さらにその傾向を強め、沿線を中心とした新しいまちづくりが進んでいる。こうした状況の中、八千代市教育委員会（以下「市教委」という。）では、千葉県教育委員会の指導のもと、開発事業者等から事前手続きとして提出される「埋蔵文化財の取扱いについて（確認）」（以下「確認依頼」という。）に対処し、埋蔵文化財の保護に努めている。確認調査が必要と判断される事業については、国庫及び県費の補助を受け、「市内遺跡発掘調査事業」として調査を実施している。

以下は、平成24年度に実施した「市内遺跡発掘調査事業」の各調査に至る経緯である。

仲西遺跡 a 地点

未来タウン株式会社から、平成23年1月、八千代台西10丁目の個人住宅建設事業に係る確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は宅地で、一部が周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であった。このため、市教委は、確認地の一部である50㎡について「周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、文化財保護法（以下「法」という。）第93条に基づく届出が必要」であることと、「その取扱いについて協議したい」旨（以下「遺跡が所在する旨」という。）を回答した。その後は、土地所有者（この項においては、以下「事業者」という。）と取扱いの協議を重ねた。その結果、確認調査を行うこととなり、平成24年2月に事業者から法第93条第1項の規定による土木工事のための発掘届（以下「法第93条の届出」という。）が提出され、市教委は4月17日に調査を開始した。

勝田大作遺跡 b 地点

佐藤不動産から、平成23年12月、勝田の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内で、現況は畑地で遺物の散布が見られた。市教委は、遺跡が所在する旨を回答した。その後、事業主体者は大東建設株式会社代表取締役木下博氏（この項においては、以下「事業者」という。）となり、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、平成24年2月、事業者から法第93条の届出が提出され、市教委は4月20日に調査を開始した。

麦丸遺跡 i 地点

東海住宅株式会社代表取締役大沢武夫氏（この項においては、以下「事業者」という。）から、平成24年4月、大和田新田字麦丸台の宅地造成事業に係る確認依頼が提出された。確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内で、現況は畑地で遺物の散布が見られた。市教委は遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、同月に事業者から法第93条の届出が提出され、市教委は5月11日に調査を開始した。

川崎山遺跡 r 地点

大和ハウス工業株式会社から、平成24年、萱田字中台の宅地造成事業に係る確認依頼が提出された。確認地の現況は駐車場で、地表面観察はできなかったが、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるため、市教委は遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、同年5月に大和ハウス工業株式会社船橋支店支店長井原健至氏から法第93条の届出が提出され、市教委は6月12日に調

査を開始した。

内野南遺跡 f 地点

土地所有者（この項においては、以下「事業者」という。）から、平成24年5月、吉橋字内野の倉庫建設事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は山林で、地表面観察はできなかったが、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるため、市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、事業者が下草刈りと境界確認のための一部伐採を実施した後に確認調査を行うこととなり、6月、事業者から法第93条の届出が提出され、市教委は準備の整った7月5日に調査を開始した。

内野南遺跡 g 地点

株式会社味泉代表取締役湯浅ふさ子氏（この項においては、以下「事業者」という。）から、平成24年、吉橋字内野の工場建設事業に係る確認依頼が提出された。確認地のうち工場敷地については、過去無し回答済みであったが、工場を増築する山林部分については、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるため、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、事業者が下草刈りを実施した後に確認調査を行うこととなり、同年6月に事業者から法第93条の届出が提出され、市教委は準備の整った8月10日に調査を開始した。

小板橋遺跡 f 地点

一建設株式会社代表取締役堀口忠美氏（この項においては、以下「事業者」という。）から、平成24年、大和田字台田道の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は荒蕪地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるため、市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、同年7月に事業者から法第93条の届出が提出され、市教委は9月4日に調査を開始した。

持田遺跡 d 地点

株式会社オカムラホーム代表取締役金子保夫氏（この項においては、以下「事業者」という。）から、平成24年7月、村上字松葉の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は宅地及び畑地で、雑草が繁茂し地表面観察は困難であったが、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるため、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、事業者が下草刈りを実施した後に確認調査を行うこととした。8月に事業者から法第93条の届出が提出され、市教委は準備の整った9月6日に調査を開始した。

新東原遺跡 k 地点

株式会社北総プランナー代表取締役佐久間高志氏から、平成24年、勝田字新東原の宅地造成事業のための確認依頼が提出された。確認地の現況は山林で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるため、市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、同年9月に土地所有者から法第93条の届出が提出され、市教委は11月7日に調査を開始した。

八千代都市計画基本図



第1図 平成24年度調査 市内遺跡位置図
(八千代都市計画基本図に加筆)

堰場台遺跡 a 地点

株式会社グランドラインコーポレーション代表取締役久保利栄氏（この項においては、以下「事業者」という。）から、平成24年10月、大和田字堰場台・字堀込の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は社宅跡地で、平成22年4月に当時土地所有者であった成田国際空港株式会社から確認依頼があった際に、当該地が昭和58年5月～6月に箱式石棺を検出し調査した堰場台古墳の隣接地であるため、試掘を実施した。その結果、堰場台古墳の周溝と考えられる溝跡を検出し、さらに弥生時代終末～古墳時代前期と考えられる竪穴住居跡1軒を検出した。このため、当該地に堰場台古墳と新発見の堰場台遺跡が所在する旨を千葉県教育委員会に報告したという経緯がある。以上により、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。現状では社宅建物の他アスファルト・コンクリート舗装やテニスコートなどの施設が残っていて、十分な確認調査の実施は困難と判断されたため、事業者が建物以外の舗装等を撤去した後に確認調査を行うこととした。平成24年10月に、事業者から法第93条の届出が提出され、市教委は準備の整った12月26日に調査を開始した。

北裏畑遺跡 e 地点

株式会社レスパイトサービス代表取締役木内誠氏（この項においては、以下「事業者」という。）から、平成24年、萱田町字萱田道の宅地造成事業のための確認依頼が提出された。確認地の現況は畑地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるため、市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、同年11月に事業者から法第93条の届出が提出され、市教委は平成25年1月18日に調査を開始した。

上高野白幡遺跡 a 地点

未来タウン株式会社から、平成24年12月、上高野字柴栗の太陽光発電事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は駐車場で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、近隣で遺構・遺物が検出されている。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、事業主体者は、松能株式会社代表取締役付雪花氏となり、平成25年3月に法第93条の届出が提出された。市教委は、3月14日に調査を開始した。

新東原遺跡 l (エル) 地点

土地所有者（この項においては、以下「事業者」という。）から、平成25年2月、勝田字新東原の個人住宅建設事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は畑地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるため、市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、同月、事業者から法第93条の届出が提出され、市教委は地鎮祭後の3月18日に調査を開始した。

II 各調査の概要

1. 仲西遺跡 a 地点

遺跡の立地と概要

仲西遺跡は、市域南西部の台地上平坦面に立地する遺跡である。高津川から南に分岐する谷津の南部に当たる駒留谷津が北にあり、駒留谷津から南に入る小支谷が東西にあるが、現地はほとんど谷津の影響が感じられない地形である。本遺跡は市街化が進んだ地域内にあり、試掘以外には調査事例がなく、奈良・平安時代の包蔵地とされているが、実態の不明な遺跡である。今回の地点は個人住宅の庭の一部で、標高約28mの平坦地である。

調査の方法と経過

庭の南東隅に2m×3m、6㎡のトレンチを1箇所設定、人力で掘削し遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成24年4月17日から18日で、17日機材搬入、トレンチ設定、人力による掘削、完掘、精査、土層調査。18日実測記録、埋め戻し、機材撤収し、調査を終了した。

調査の概要

トレンチ南西壁の土層の観察所見は、表土（I-1）はしまり・可塑性とも弱い黒褐色土でブロックなどの現代ゴミが混じる。I-2層はしまりの強い褐色土で、ロームが混じる。盛土等造成工事に由来するものと考えられた。それらの厚さが0.7m以上あり、その下はハードロームであった。攪乱されており、良好な土層は検出されなかった。遺構・遺物とも確認されなかった。

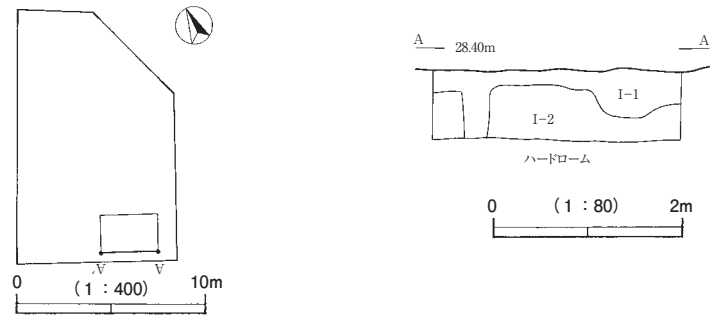
調査のまとめ

本地点は造成工事等の影響を受け、遺跡としては破壊されていることを確認した。



第2図 仲西遺跡 a 地点位置図

II 各調査の概要



第3図 仲西遺跡a地点トレンチ実測図

図版1 仲西遺跡a地点



(1) 近景



(2) 調査状況



(3) トレンチ掘削状況



(4) 土層断面

2. 勝田大作遺跡 b 地点

遺跡の立地と概要

勝田大作遺跡は、市域の南東端、東から西～北へと屈曲して流れる勝田川を南～西に臨む台地上に立地する。勝田の集落と勝田台の住宅地に挟まれた広大な畑地が遺跡範囲である。

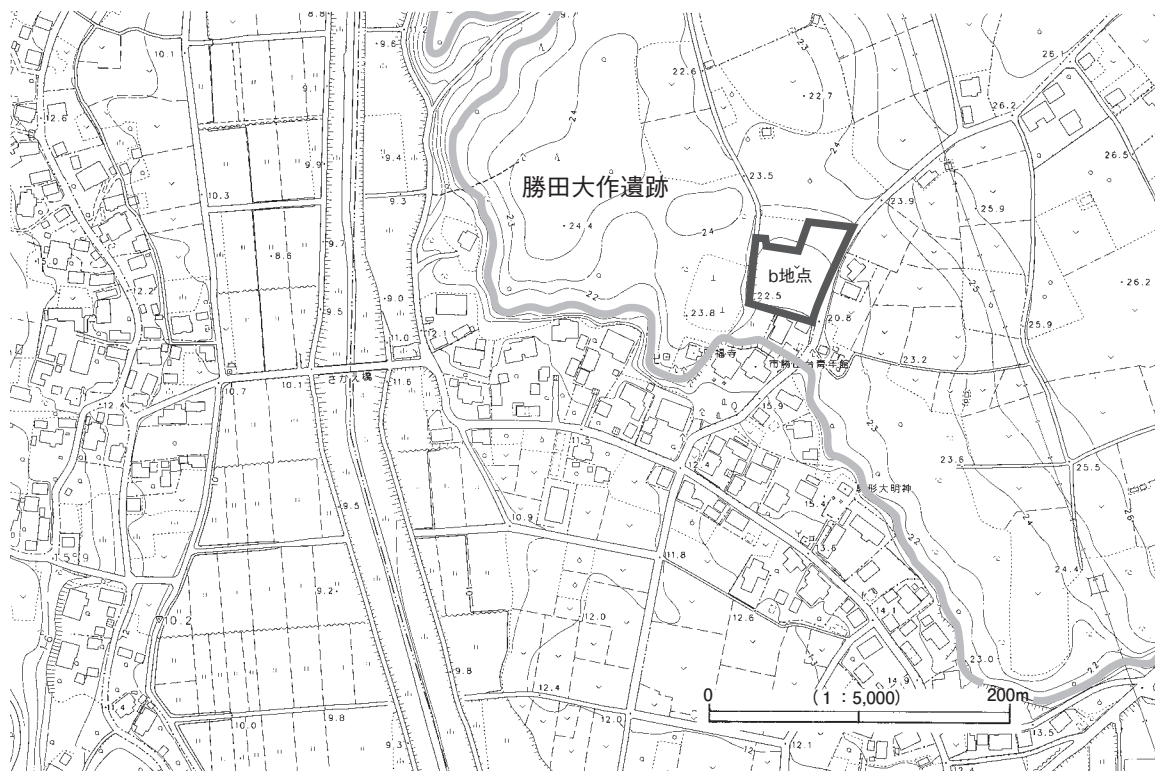
これまでの調査は、昭和60年度に遺跡北部当たる病院建設に伴い、八千代市遺跡調査会が6,168.02㎡を対象に発掘調査を行っている（a 地点とする）。確認調査で古墳時代の竪穴住居跡13軒等を検出し、3,268㎡を現状保存とし、2,900㎡について引き続き本調査を実施した。その結果、古墳時代前期の竪穴住居跡6軒、古墳時代後期の竪穴住居跡3軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒等を調査した。また古墳時代後期の土坑2基からは貝ブロックが検出された。古墳時代の集落跡を中心に各時代の資料を得た。

b 地点は、遺跡中央部西端付近の畑地で、地表面に土師器14点、須恵器1点等の散布を確認した。標高約20m～22mで、北が高く南に向かって傾斜している。南西方向には、八千代市指定無形民俗文化財の勝田の獅子舞が舞われる円福寺がある。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて10mごとに区画し、アルファベットと数字の組合せで大グリッドを表現し、さらにこれを5mごとに4つの小グリッドに分け、1～4の枝番号を付けた。2m×4mのトレンチを大グリッドに2箇所を原則として配置し、合計35箇所280㎡分を設定した。これらを人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成24年4月20日から5月9日で、4月20日機材搬入、杭設置、トレンチ設定。24日・25日人力による掘削。25・26日重機による掘削。25日～5月1日トレンチ内精査。1日・7日土層調査、実測記録作業。7日～9日重機による埋め戻し。9日機材を撤収し、調査を終了した。



第4図 勝田大作遺跡 b 地点位置図

調査の概要

比較的良好な土層を確認した。C4-1T, E4-1T, G4-1Tの北西壁の観察所見で, IIa層(黒褐色土, 腐植土層), IIb層(黄褐色土, 新期富士テフラ層), IIc層(暗褐色土, ローム漸移層。G4-1Tでは層厚が0.5m以上あり, ロームの含有量が下部で多くなるため2層に分層した), III層(ソフトローム層)が認められた。表土及び盛土のI層はしまりがなく, 褐色土(I-1・2), 暗褐色土(I-3), 黄褐色土(I-4)が認められた。E2-1TではI層の厚さが0.8m~0.9mあり, 直下でハードローム層に達しており, 攪乱されていると判断した。

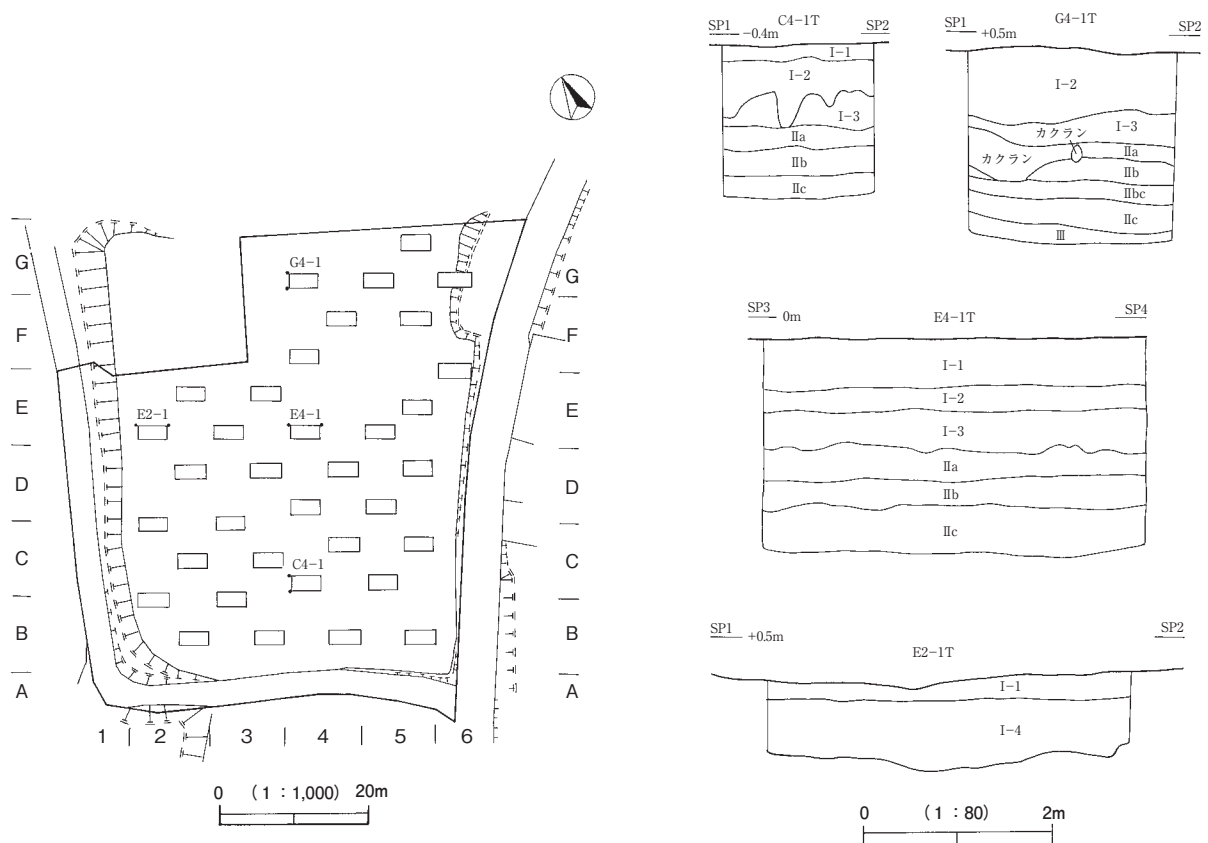
遺構は検出されなかった。遺物は191点が出土し, 内訳は土師器が105点と約55%を占め, 須恵器32点, 陶磁器17点, 縄文土器10点, 小礫9点, 焼成粘土塊4点, かわらけ・瓦・鉄製品各3点, 剥片・瓦質土器・泥面子・鉄滓各1点等である。これらのうち11点を抽出し, 図示した(第6図・第1表)。

調査のまとめ

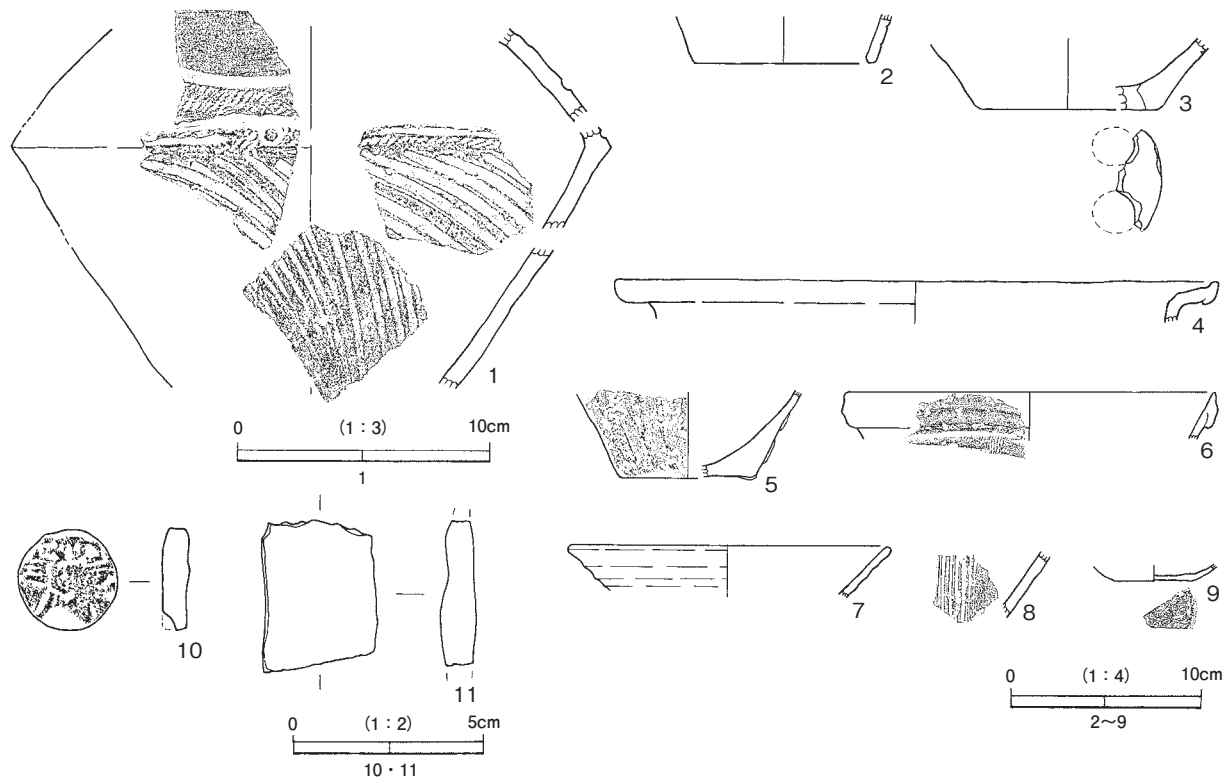
遺構検出には至らなかったが, 良好な土層と土師器を中心とした多くの遺物を確認した。付近に縄文時代や古墳時代後期, 奈良・平安時代の遺構が存在している可能性を示唆する結果と評価できよう。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市遺跡調査会(2007年)『千葉県八千代市勝田大作遺跡—埋蔵文化財発掘調査報告書—平成18年度』



第5図 勝田大作遺跡b地点トレンチ実測図



第6図 勝田大作遺跡 b 地点出土遺物

第1表 勝田大作遺跡 b 地点出土遺物

No.	出土地点	器形	部位・状態	計測値 (mm)	○胎土/石材 ●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	D3-4	深鉢 算盤玉型	胴部	胴部最大径236	○細砂, 粗砂 ●暗褐色, 褐色	内) ミガキ。外) 屈曲部の上は, 沈線・LR縄文による磨消縄文, 円形竹管文, 屈曲部の下は横～縦方向の条線文。	縄文土器 後期加曽利B式
2	F4-4	甌	底縁部	復元底径96	○粗砂, 赤褐色粒子 ●橙褐色	内) 斜方向ナデ。 外) 縁は面取りされる。横方向ナデ, 輪積痕。	土師器
3	F4-4	甌	底部	復元底径98	○細砂, 粗砂 ●内) 褐色 外) 暗褐色, 赤褐色	底面に2孔が見える。内) ミガキ。外) 斜方向のヘラ削り。 底外) ヘラ削り, ミガキ。	土師器
4	F4-1	甌	口縁～頸部	復元口径318	○粗砂多 ●内) 黒褐色 外) 褐色, 暗褐色	内) 横方向ナデ。 外) 横方向ナデ。	土師器
5	D2-1	甌	底部	復元底径72	○雲母粗砂, 石英細礫多 ●内) 淡褐色 外) 褐色	内) ナデ。 外) 化粧土のような焼成粘土が付着。ヘラ削り痕顕著。	土師器
6	D2-4	甌	口縁部	復元口径194	○細砂多 ●内) 橙褐色 外) 褐色	内) 横方向ナデ痕顕著。 外) 横方向ナデ痕顕著。	土師器
7	F5-4	皿	口縁部	復元口径170	○細砂, 粗砂 ●淡褐色	ロクロ成形。内) ミガキ。 外) 横方向ナデ。	土師器
8	F5-4	すり鉢	胴部	残存高35	○細砂 ●内) 黒色 外) 褐色	内) すり目が7本見える。 外) ナデ, ミガキ。	瓦質土器
9	F5-4	小皿	底部	復元底径38	○細砂 ●淡橙褐色	ロクロ成形。内) ナデ。 外) 横方向ナデ。底外) 糸切痕。	かわらけ
10	F5-4	泥面子 円盤形	略完形 摩耗	径26 厚6～7	○細砂 ●橙褐色	ふくら雀か。	
11	F4-1	砥石	破片	残存40×30 厚9.5	○流紋岩か ●灰白色	使い込まれて薄くなっている。 4面とも使用している。	

図版2 勝田大作遺跡b地点



(1) 調査状況



(2) C4-1T土層断面



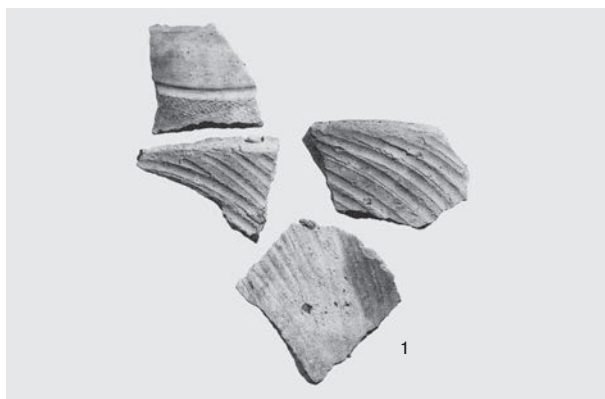
(3) E4-1T土層断面



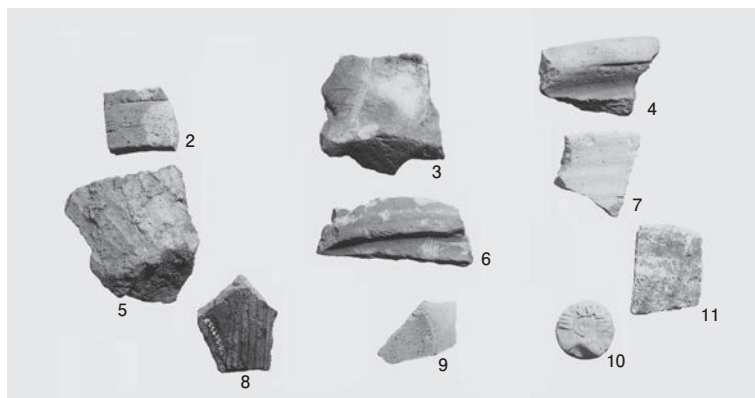
(4) G4-1T土層断面



(5) E2-1T土層断面



(6) 出土遺物-1- (番号は第6図と同じ)



(7) 出土遺物-2- (番号は第6図と同じ)

3. 麦丸遺跡 i 地点

遺跡の立地と概要

麦丸遺跡は、市域の中央部、新川西岸の台地上に立地する。新川とその支谷である栄重谷津^{えいじゅう}、桑納川とその支谷である甚左衛門谷津^{じんざむ}によって画された広大な台地上一帯が遺跡である。これまでに8地点の発掘調査が実施されており、a・b・d・h各地点は縄文時代の遺構・遺物を主体とし、e地点では弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居跡が検出されている。また、かつては遺跡範囲内に金塚所在塚、南西方向には麦丸台塚群があり、近世の塚が散在する地域であった。

i地点は遺跡の南東部の標高約23mの畑地である。地表面には遺物が多く散布し、土師器183点、鉄滓7点、須恵器・泥面子各6点等を採集した。

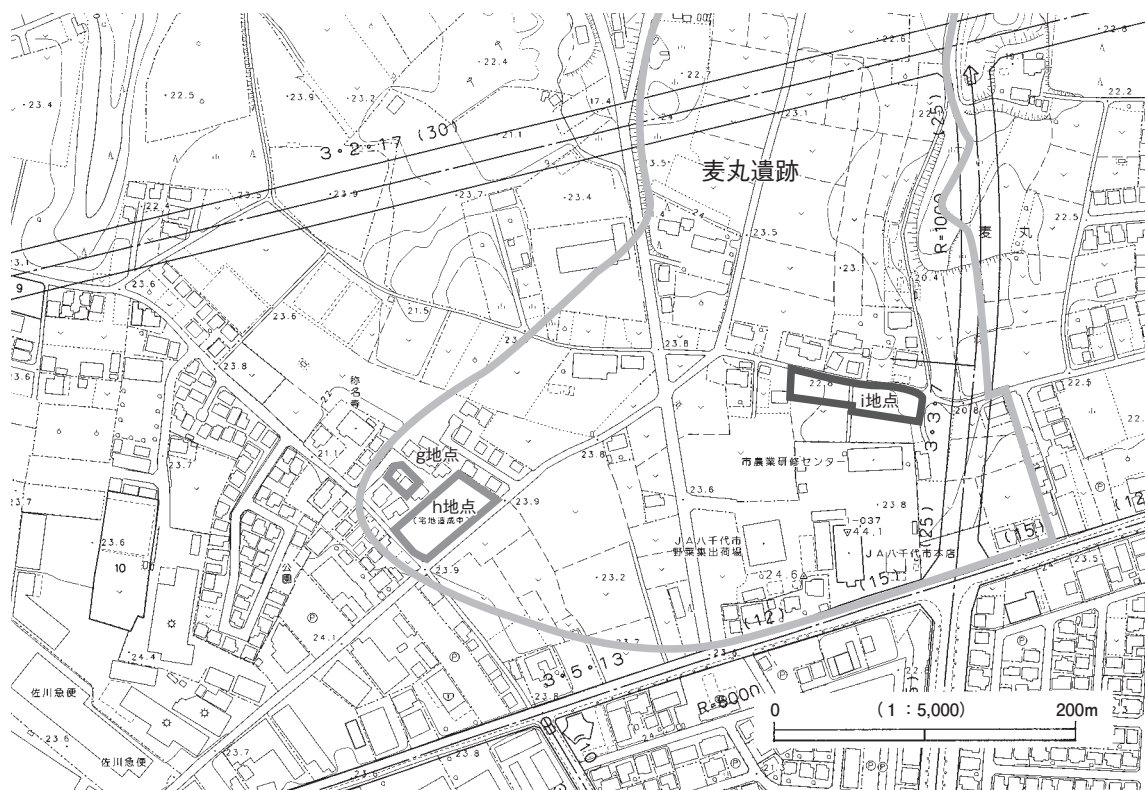
調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて10mごとに区画し、アルファベットと数字の組合せで大グリッドを表現し、さらにこれを5mごとに4つの小グリッドに分け、1～4の枝番号を付けた。2m×4mのトレンチを大グリッドに2箇所を原則として配置し、合計20箇所156.8㎡分を設定した。これらを人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成24年5月11日から24日で、11日機材搬入、杭設置、トレンチ設定。14日～17日人力による掘削。16日・17日土層調査、実測記録作業。17日・18日重機による掘削。17日～21日トレンチ内精査。23日土層調査、実測記録作業。24日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

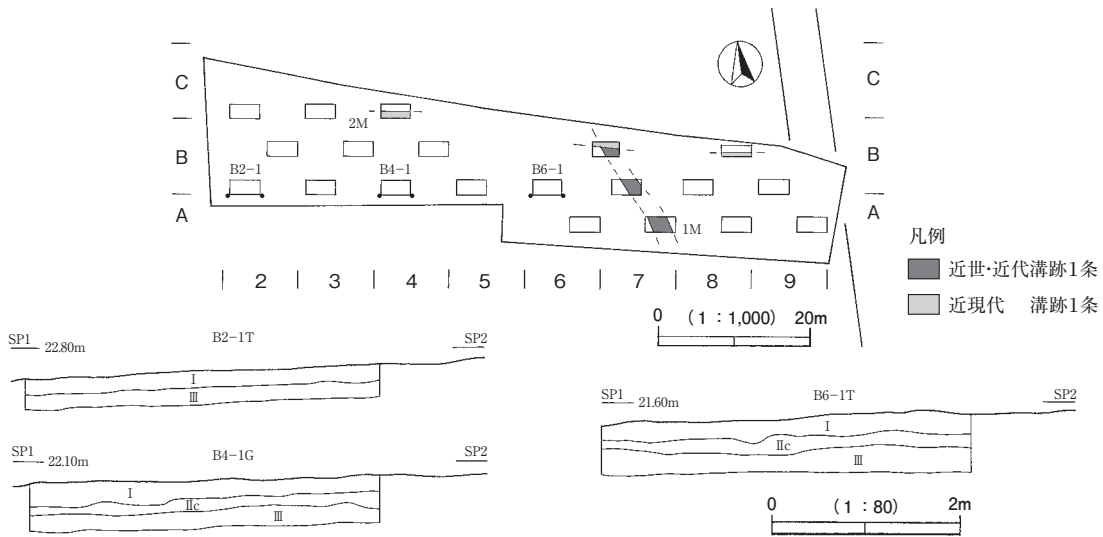
調査の概要

土層の観察所見としては、B4-1T・B6-1Tの南壁では、I層表土（耕作土）が厚さ約20cmあり、その下にIIc層（ローム漸移層）が厚さ0.1m～0.2mあり、III層（ソフトローム層）に達した。B2-1T・B7-1T南



第7図 麦丸遺跡 i 地点位置図

II 各調査の概要

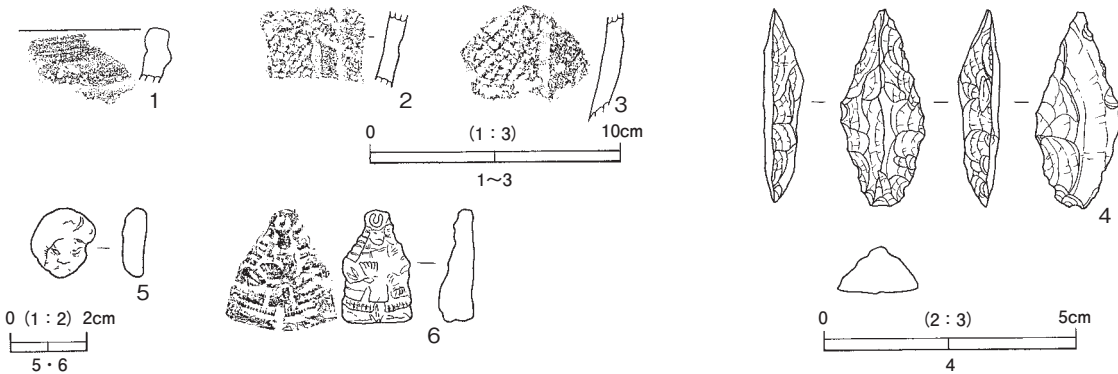


第8図 麦丸遺跡 i 地点トレンチ実測図

壁ではIIc層は確認されず、表土下でIII層に達した。III層上面の標高は、B2-1Tで22.3m~22.4m、B6-1Tでは21.1m前後であった。

遺構としては、溝跡が2条検出された。1M溝跡はA7-4T~B7-1T~B6-4・B7-3Tで、2M溝跡はC4-1T~B6-4・B7-3T~B8-4Tで確認された。B6-4・B7-3Tで交わり、2Mが1Mを切っており、1Mは近世・近代、2Mは近・現代の溝跡と判断した。覆土は1M・2Mともしまりが弱く、最上層が黒褐色土、以下は暗褐色土を主体としていた。深さは1Mが0.7m~0.8m、2Mが0.8mである。

出土遺物は40点で、内訳は縄文土器17点、土師器・陶磁器各4点、焼成粘土塊・小礫各5点、石器・剥片・須恵器・素焼土器・鉄釘各1点である。表面採集とは異なり、縄文土器が主体を占めた。6点を抽出し図化した。



第9図 麦丸遺跡 i 地点出土遺物

第2表 麦丸遺跡 i 地点出土遺物

No.	出土地点	器形	部位・状態	計測値 (mm)	○胎土/石材 ●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	A7-4G	深鉢か	波状口縁部小片	—	○粗砂, 細砂 ●淡褐色	内) ミガキ。外) ミガキ, 隆線。	縄文土器 中期加曾利E4式か
2	A7-4G	深鉢	胴部外面摩耗	—	○粗砂, 細砂 ●褐色	内) ナデ, ミガキ。外) 磨消縄文, 縄文不明瞭し, 縦方向沈線2条間を磨り消す。	縄文土器 中期加曾利E式
3	A7-4G	深鉢か	胴部凹形	—	○粗砂, 細砂 ●褐色	内) ナデ, ミガキ。外) R L磨消縄文, 縦方向沈線。胎土内の混入物が外れたことによる穴が5箇所程見える。	縄文土器 中期加曾利E式
4	B2-1G	尖頭器	略完形	39×17, 厚9	○珪質頁岩 ●淡灰褐色, 淡橙褐色	有種尖頭器, 左右対称に作られたタイプ。	
5	表採	泥面子型抜き	略完形 磨耗	18×16 厚5~6	○細砂少 ●橙褐色	顔面。	
6	表採	泥面子型抜き	略完形 一部磨耗	30×18.5 厚4.5~9.5	○緻密 ●橙色	全身像。右手に扇子を持つ。	

調査のまとめ

地表面で多数の土師器片を採集したが、発掘の結果は、縄文土器が主体であった。早期条痕文の繊維土器と中期加曽利E式が出土した。遺構は近世～現代の溝跡2条が検出された。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市遺跡調査会（1982年）『千葉県八千代市麦丸遺跡』（a地点・b地点）

八千代市教育委員会（2002年a）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』（d地点）

八千代市教育委員会（2002年b）『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書1』（金塚所在塚）

八千代市教育委員会（2003年）『千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書』（c地点）

八千代市教育委員会（2007年a）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成18年度』（f地点）

八千代市教育委員会（2011年）『千葉県八千代市麦丸遺跡h地点一宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』

八千代市教育委員会（2012年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成23年度』（g地点、h地点）

図版3 麦丸遺跡 i 地点



(1) 調査状況



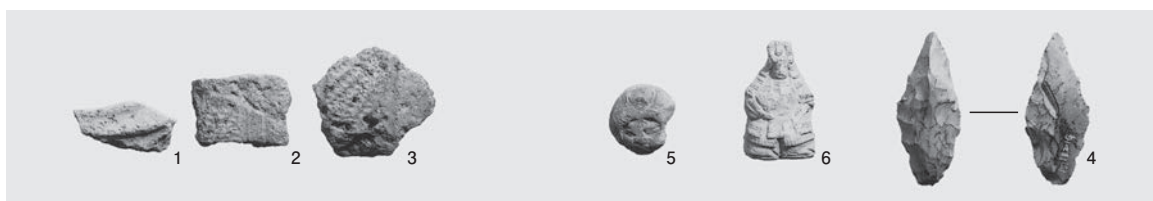
(2) B6-1T西壁土層断面



(3) B6-1T南壁土層断面



(4) A7-4T溝跡検出状況



(5) 出土遺物（番号は第9図と同じ）

4. 川崎山遺跡 r 地点

遺跡の立地と概要

川崎山遺跡は、市域南部中央、新川西岸の台地上にある。

本遺跡においては、これまでに17地点で調査が行われ、弥生時代後期～古墳時代中期の集落跡等を中心に各時代の遺構・遺物が検出されている。

今回の r 地点は、遺跡北西部の標高約23.5mの碎石敷きの駐車場である。

調査の方法と経過

2m×5mのトレンチを5m間隔で2箇所、20㎡分設定した。重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成24年6月12日から14日で、12日機材搬入、トレンチ設定、重機による掘削、トレンチ内精査。13日トレンチ内精査、土層調査、実測記録作業。14日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

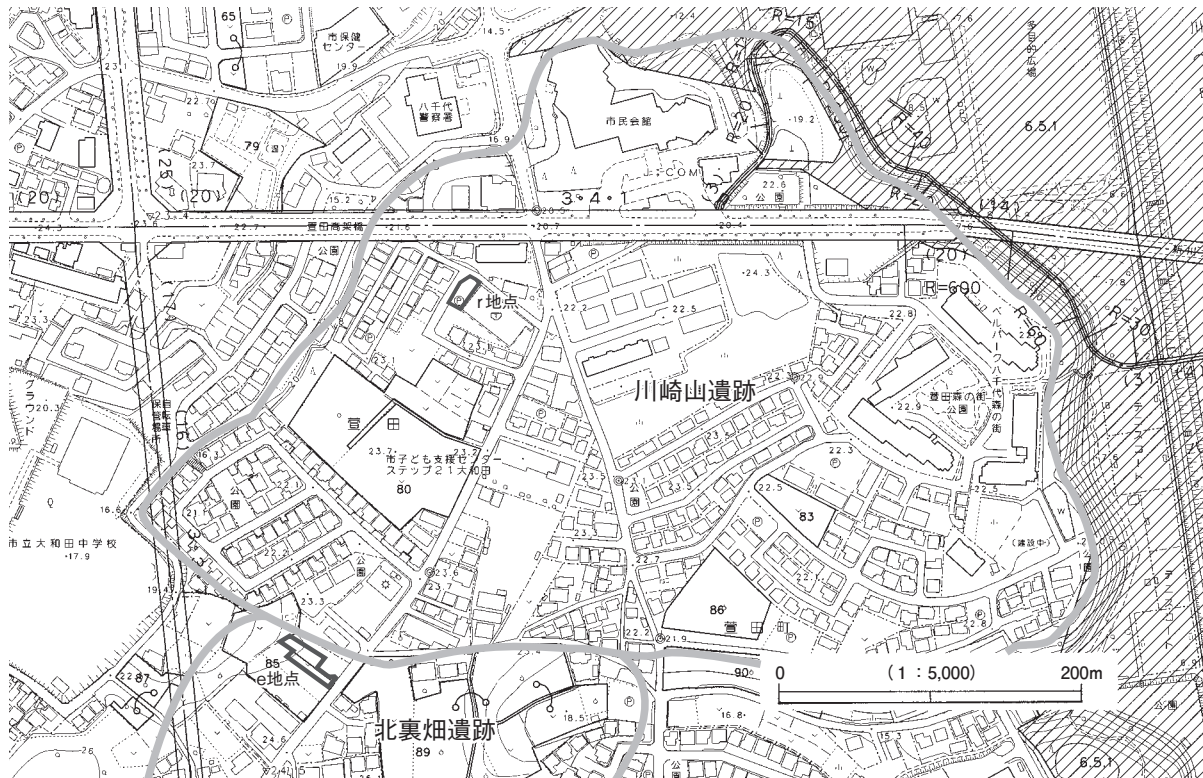
調査の概要

Aトレンチ北西壁・北東壁の土層観察所見は、駐車場の碎石が厚さ0.3m～0.4mあり、その下に旧表土・盛土の暗褐色土が層厚0.3m～0.5m堆積し、その下でⅢ層（褐色土、ソフトローム）に達した。Ⅲ層上面の標高は22.7m前後であった。良好な土層は確認されなかった。遺構は検出されなかった。

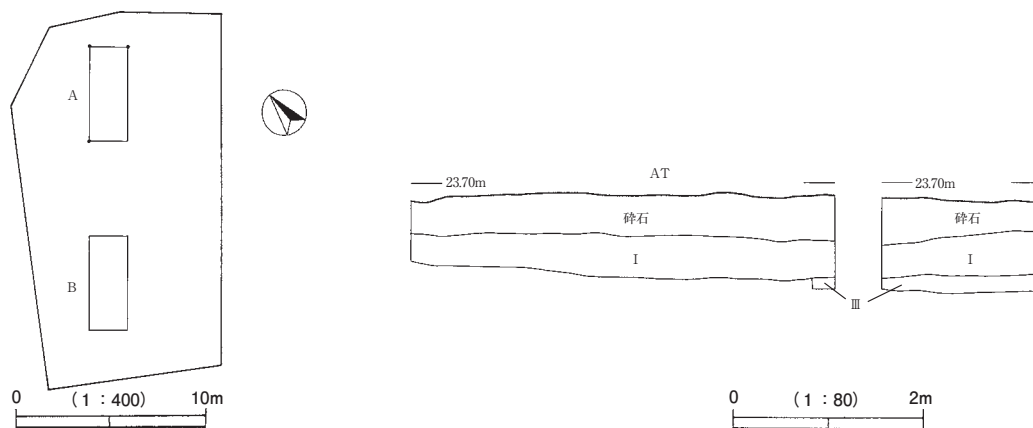
遺物は、Aトレンチから土器片2点が出土した。縄文土器片と土師器ロクロ坏片である。縄文土器を図示した。前期後半と考えられる。

調査のまとめ

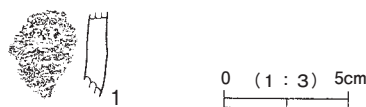
遺物は縄文土器と土師器合計2点が出土した。遺構は検出されなかった。



第10図 川崎山遺跡 r 地点・北裏畑遺跡 e 地点位置図



第11図 川崎山遺跡 r 地点トレンチ実測図



第12図 川崎山遺跡 r 地点出土遺物

第3表 川崎山遺跡 r 地点出土遺物

No	出土地点	器形	部位・状態	計測値 (mm)	○胎土/石材 ●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	Aトレンチ	深鉢	胴部 小片	—	○細砂, 粗砂 ●橙褐色	内) ナデ。 外) 斜方向ナデ。擦痕あり。	縄文土器 前期か

本遺跡に関する調査報告書

- 八千代市遺跡調査会 (1980年) 『萱田町川崎山遺跡』 (a 地点)
- 八千代市教育委員会 (1992年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成3年度』 (b 地点確認調査)
- 八千代市教育委員会 (1994年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成5年度』 (c 地点確認調査)
- 八千代市教育委員会 (1998年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成9年度』 (d 地点確認調査, e 地点確認・本調査)
- 八千代市教育委員会 (1999年 a) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成10年度』 (f 地点確認調査)
- 八千代市川崎山遺跡調査会 (1999年) 『千葉県八千代市川崎山遺跡—埋蔵文化財発掘調査報告書—』 (c 地点本調査)
- 八千代市教育委員会 (1999年 b) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成11年度』 (g 地点確認・本調査)
- 八千代市教育委員会 (2000年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』 (h 地点・i 地点確認調査)
- 八千代市教育委員会 (2002年) 『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書 1』 (b 地点本調査)
- 八千代市教育委員会 (2003年) 『千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書』 (j 地点確認・本調査)
- 八千代市遺跡調査会 (2003年) 『千葉県八千代市川崎山遺跡 d 地点—萱田町川崎山土地区画整理事業に先行する埋蔵文化財発掘調査報告書—』 (d 地点本調査)
- 八千代市遺跡調査会 (2004年) 『千葉県八千代市川崎山遺跡 h 地点—店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書—』 (h 地点本調査)
- 八千代市遺跡調査会 (2006年) 『千葉県八千代市川崎山遺跡 k 地点—宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 (k 地点本調査)
- 八千代市教育委員会 (2008年 a) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成19年度』 (l 地点確認調査)
- 八千代市教育委員会 (2008年 b) 『千葉県八千代市逆水遺跡 f 地点ほか—不特定遺跡発掘調査報告書 V—』 (k 地点確認調査)
- 八千代市教育委員会 (2008年 c) 『千葉県八千代市川崎山遺跡 m 地点発掘調査報告書』 (m 地点本調査)
- 八千代市教育委員会 (2008年 d) 『千葉県八千代市川崎山遺跡 n 地点発掘調査報告書—宅地開発事業に先行する埋蔵文化財

図版4 川崎山遺跡 r 地点



(1) 調査状況



(2) AT掘削状況



(3) AT北西壁土層断面



(4) AT北東壁土層断面



(5) 出土遺物

発掘調査一』(n 地点本調査)

八千代市教育委員会 (2008年 e) 『千葉県八千代市川崎山遺跡— f 地点埋蔵文化財発掘調査報告書—』(f 地点本調査)

八千代市教育委員会 (2009年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成20年度』(n 地点確認調査)

八千代市教育委員会 (2010年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成21年度』(o 地点確認調査)

八千代市教育委員会 (2013年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成24年度』(p 地点・q 地点確認調査)

5. 内野南遺跡 f 地点

遺跡の立地と概要

内野南遺跡は、市域西部、桑納川から南に入る花輪谷津と石神谷津に挟まれた台地上に所在する。これまでに5地点で調査を実施し、縄文時代、奈良時代の遺構・遺物等が検出されている。

今回のf地点は、遺跡の北部～西部に位置し、c地点に隣接する標高22.5m～26.2mの山林である。周囲の開発が進んでいるため旧地形が見えにくくなっているが、f地点の中央は低くなるなど起伏がある。これは花輪谷津から入る谷の影響で、f地点を通してc地点に達していたらしい。

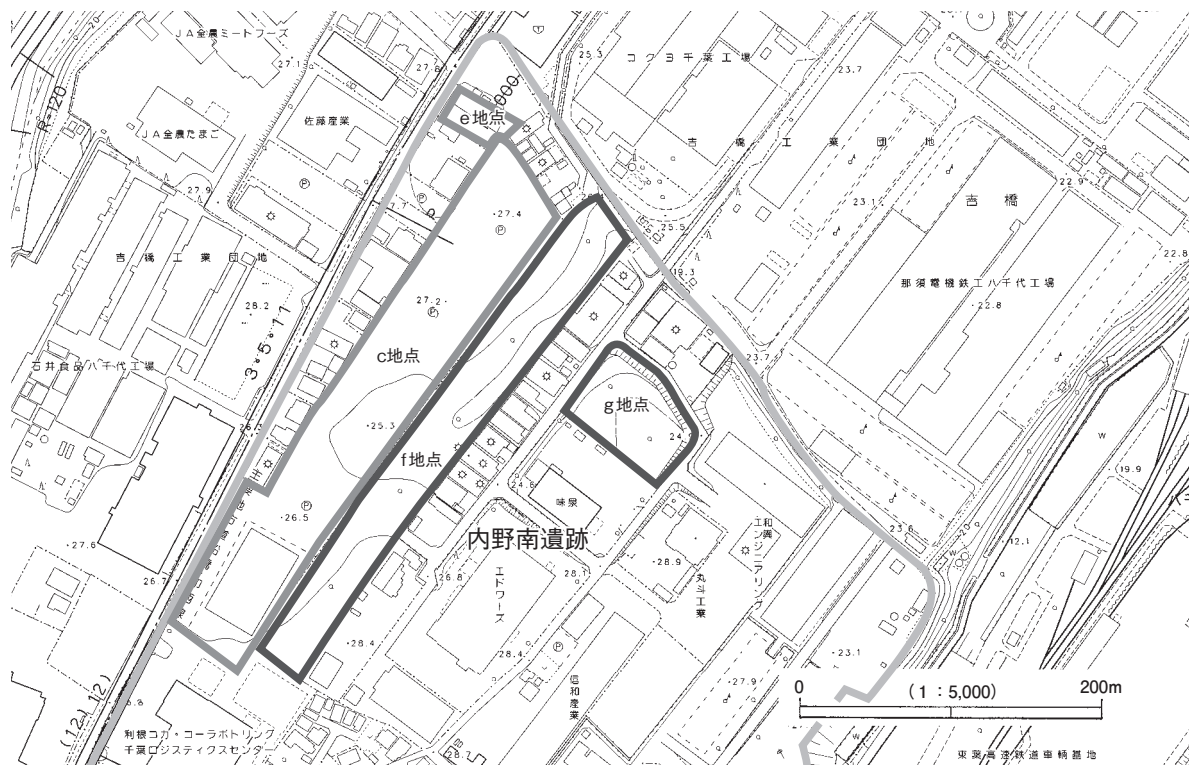
調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて10mごとに区画し、アルファベットと数字の組合せで大グリッドを表現し、さらにこれを5mごとに4つの小グリッドに分け、1～4の枝番号を付けた。2m×4mのトレンチを大グリッドに1箇所を原則として配置し、合計133箇所1,064㎡分を設定した。これらを人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成24年7月5日から8月8日で、7月5日機材搬入。5日～17日杭設置、下草刈り。11日～18日トレンチ設定、12日～23日人力による掘削、12日～25日重機による掘削、18日～8月7日トレンチ内精査。7月26日～8月7日土層調査、実測記録作業。7月31日～8月7日重機による埋め戻し。8日機材を撤収し、調査を終了した。

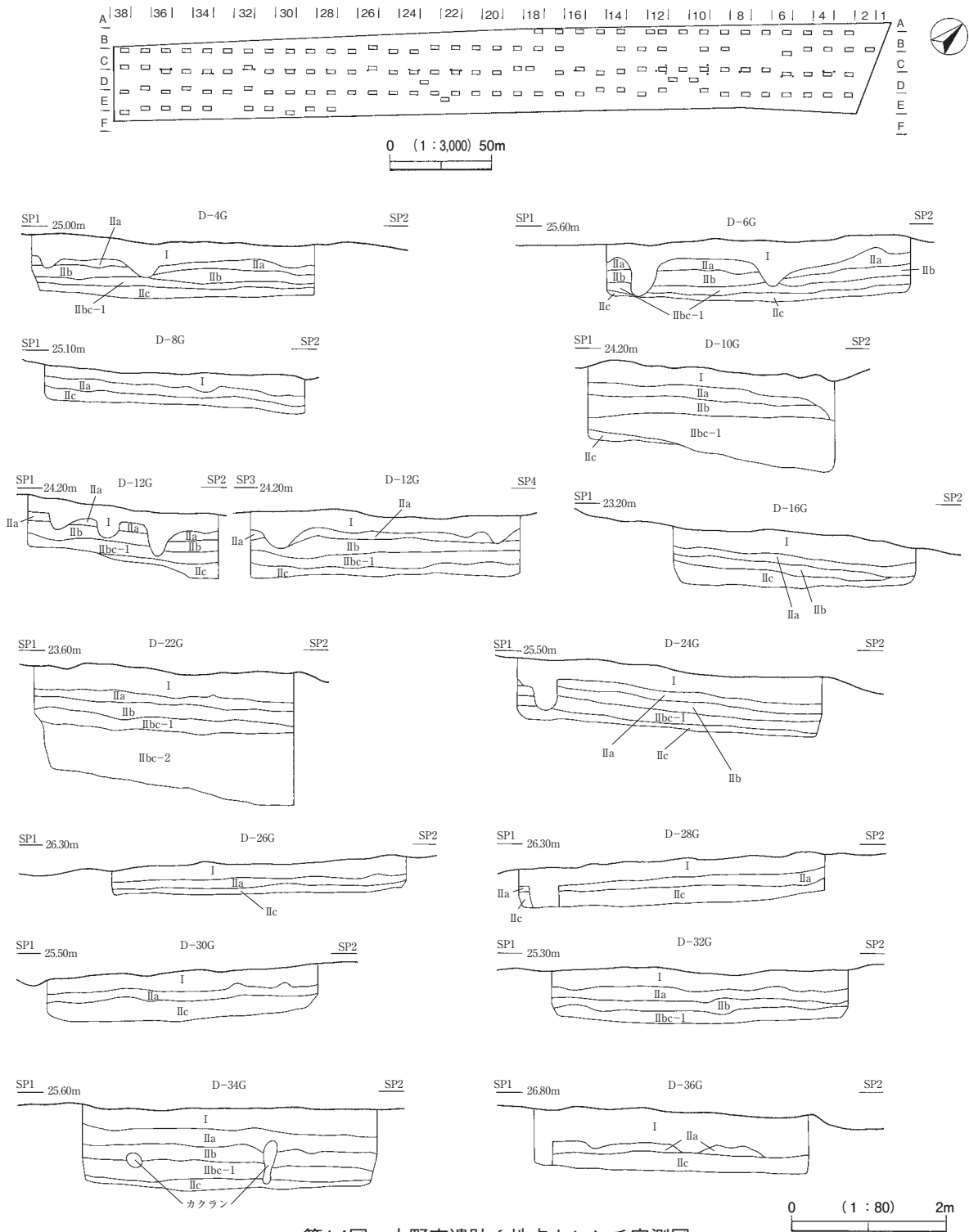
調査の概要

土層は、主にDグリッドの列に観察面を設定し記録した。基本的に、I層（表土）、IIa層（黒褐色土、腐植土層）、IIb層（暗黄褐色土、新期富士テフラ層）、IIbc-1層（暗褐色土）、IIc層（黄褐色土、ローム漸移層）を確認し、D-22GのみにIIbc-2層（黒色土、可塑性強い、谷に堆積した土）を確認した。調査区北

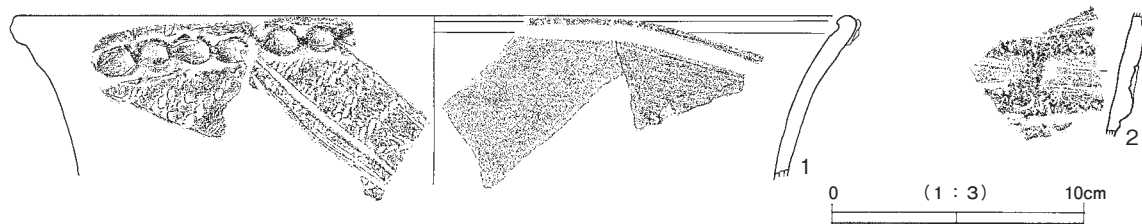


第13図 内野南遺跡 f 地点・g 地点位置図

II 各調査の概要



東部から南西部に向かって見て行くと、D-4G北西壁では、地表面の標高が24.7m～24.9m、IIc層下面の標高が24.1m前後で、I層、IIa層、IIb層、IIbc-1層、IIc層を確認した。D-6G南東壁では地表面の標高が25.4m前後、IIc層下面の標高が24.6m前後と高くなり、D-8G南東壁では地表面の標高が24.7m～24.9m、IIc層下面の標高が24.3m～24.5mで、南西に向かって低くなる。ここでは、IIb層、IIbc-1層は検出されなかった。D-10G北東壁では地表面の標高が23.8m～24.0m、IIc層は一部で検出され下面の標高は23.0m前後であ



第15図 内野南遺跡 f 地点出土遺物

第4表 内野南遺跡 f 地点出土遺物

No	出土地点	器形	部位・状態	計測値 (mm)	○胎土/石材 ●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	D-14	深鉢	口縁部 2点接合	復元口径324 残存高64	○粗砂 ●内) 橙褐色 外) 褐色	内) 沈線1条, 横方向ミガキ。 外) 紐線文。地文は粗い縄文LRか。斜方向沈線。	縄文土器 後期 加曾利B式粗製
2	E-20G	深鉢	胴上部 摩耗	—	○粗砂, 細礫 ●内) 橙褐色 外) 淡褐色, 灰色	内) ナデ。 外) RL帯縄文2段, 沈線。縦長の瘤文 (の痕跡か)。	縄文土器 後期 安行1式精製

るが、IIbc-1層が厚さ0.2m～0.7mと南東に向かって厚さを増し、IIc層を捉えることができなかった。谷地形と考えられる。D-12G・14G南東壁では地表面の標高が23.8m～23.9m、IIc層下面の標高が23.0m～23.1m、D-16G南東壁では地表面の標高が22.6m～23.1m、IIc層下面の標高が22.2m前後と低くなり、IIb層が南西側で途切れ、IIbc-1層は検出されなかった。D-22G北西壁では、地表面の標高が23.2m～23.4m、IIc層は検出されず、IIbc-1層の下にIIbc-2層が厚さ0.6m～0.9m堆積していた。IIbc-2層が検出されたのはこのトレンチのみである。谷地形と考えられる。D-24G北西壁では、地表面の標高が24.9m～25.4m、IIc層下面の標高が24.4m～24.6m、D-26G南東壁では地表面の標高が25.9m～26.1m、IIc層下面の標高が25.7m前後で、D-24G・26Gともに南西に向かって高くなっている。D-28G北西壁では、地表面の標高が25.9m～26.1m、IIc層下面の標高が25.5m～25.7m、D-30G北西壁では地表面の標高が25.1m～25.4m、IIc層下面の標高が24.6m～24.7mで、D-28G・30Gともに南西に向かって低くなっている。またD-26G・28G・30Gでは、IIb層・IIbc-1層は検出されなかった。D-32G南東壁では地表面の標高が25.1m前後、IIc層上面の標高が24.4m～24.5m、D-34G南東壁では地表面の標高が25.4m前後、IIc層下面の標高が24.4m前後である。D-36G北西壁では地表面の標高が26.3m～26.6m、IIc層下面の標高が25.8m前後と高くなる。ここではI層が0.4～0.5mとやや厚く、IIb層・IIbc-1層は検出されなかった。

遺構は、検出されなかった。遺物は、縄文土器5点、剥片5点(チャート・黒色安山岩等)、焼礫3点、高師小僧3点合計16点が出土した。うち縄文土器2点を図示した。

調査のまとめ

比較的良好な土層を確認した。遺物は、縄文土器等を検出したが、分布は疎であった。遺構は検出されなかった。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会(1999年)『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成10年度』(b地点)

八千代市遺跡調査会(2000年)『千葉県八千代市内野南遺跡a地点発掘調査報告書』(a地点)

八千代市教育委員会(2004年)『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成15年度』(c地点)

八千代市教育委員会(2008年)『千葉県八千代市内野南遺跡d地点発掘調査報告書—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査—』(d地点本調査)

八千代市教育委員会(2009年)『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成20年度』(d地点確認調査)

八千代市教育委員会(2012年)『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成23年度』(e地点)

図版5 内野南遺跡 f 地点



(1) 調査状況 - 1 -



(2) 調査状況 - 2 -



(3) D-4G北西壁土層断面



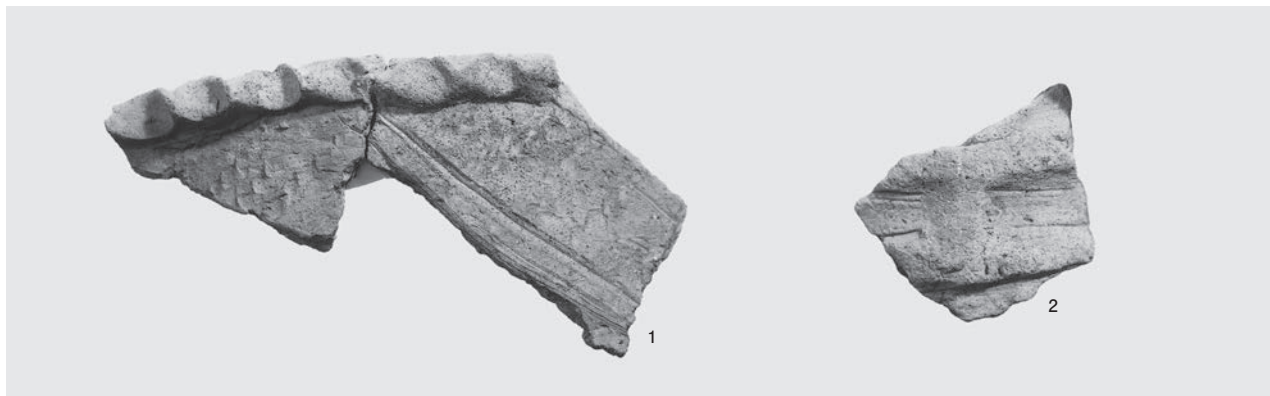
(4) D-10G北東壁土層断面



(5) D-28G北西壁土層断面



(6) D-36G北西壁土層断面



(7) 出土遺物 (番号は第15図と同じ)

6. 内野南遺跡 g 地点

遺跡の立地と概要

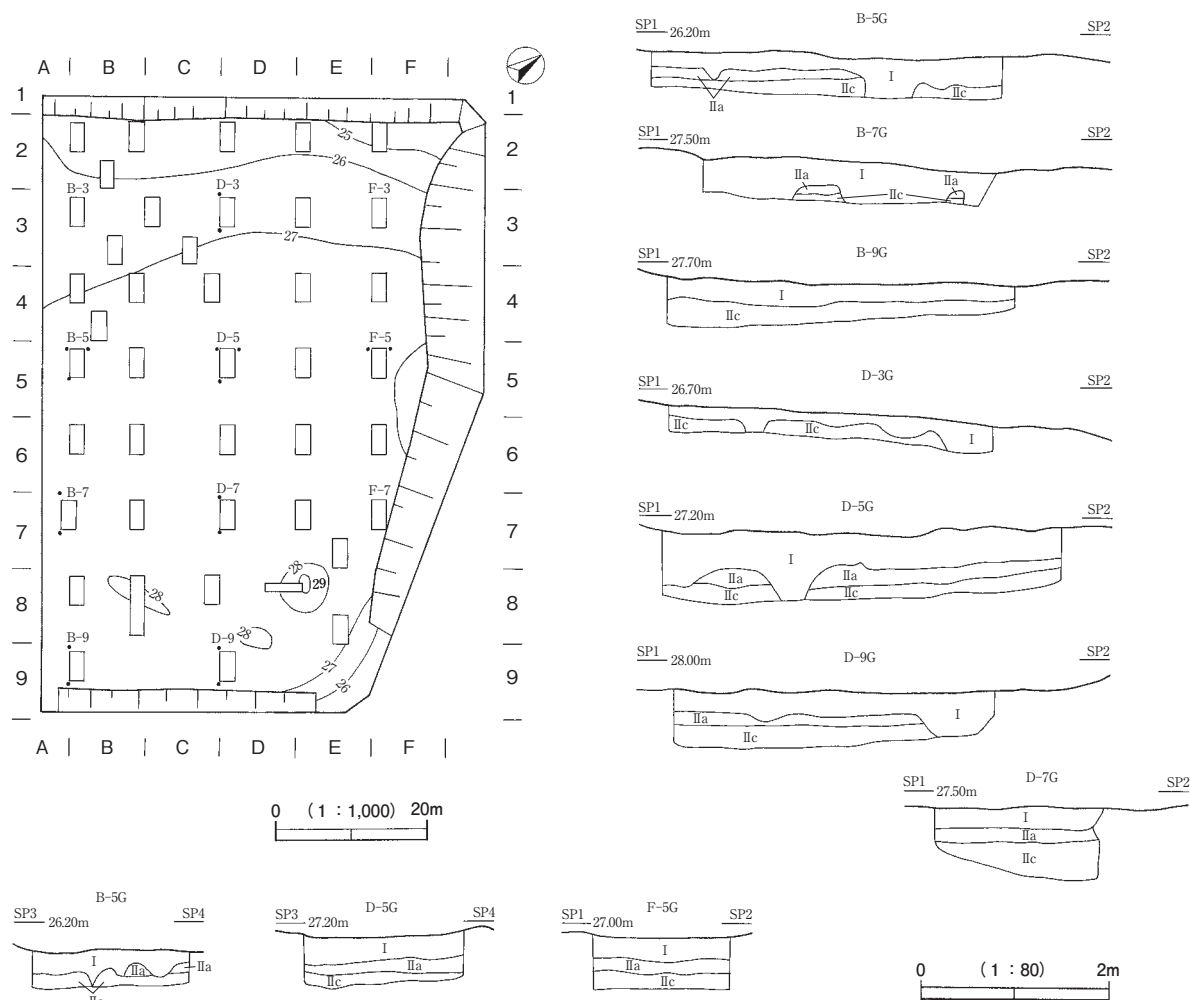
遺跡の立地は、前項を参照されたい。

g 地点は、遺跡中央の北東寄りに位置する。標高25m～27mの山林である。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて10mごとに区画し、アルファベットと数字の組合せで大グリッドを表現し、さらにこれを5mごとに4つの小グリッドに分け、1～4の枝番号を付けた。2m×4mのトレンチを大グリッドに1箇所を原則として配置し、調査区西部に若干増設し、調査区南部に塚状・土塁状の高まりがあるため、それらを調べるためのトレンチを含め、合計42箇所341㎡分設定した。これらを人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成24年8月10日から29日で、10日環境整備、杭設置。16日杭打ち、トレンチ設定。16日～21日人力による掘削。17日～28日土層調査、実測記録。21日～23日重機による掘削、21日～28日トレンチ内精査。28日・29日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。



第16図 内野南遺跡 g 地点トレンチ実測図

調査の概要

土層観察面は、主にB列とD列に設定した。I層（表土，暗褐色土，しまり弱い），II a層（黒褐色土，I層に似るが黒色味強く，しまり弱いがI層よりはしまる），II c層（褐色土，ローム漸移層）を確認した。全体的に東～南が高く，西～北に向かって低くなっている。B-3Gでは，地表面の標高が26.0m～26.3m，II c層下面の標高が25.5m前後。D-3Gでは，地表面の標高が26.2m～26.6m，II c層下面の標高が26.0m～26.2m。B-5Gでは，地表面の標高が25.9m～26.0m，II c層下面の標高が25.5m～25.6m。D-5Gでは，地表面の標高が27.0m～27.1m，II c層下面の標高が26.3m～26.5m。B-7Gでは，地表面の標高が27.1m～27.4m，II c層下面の標高が26.8m～26.9m。D-7Gでは，地表面の標高が27.3m，II c層下面の標高が26.6m～26.8m。B-9Gでは，地表面の標高が27.5m～27.6m，II c層下面の標高が27.0m～27.1m。D-9Gでは，地表面の標高が27.7m～27.8m，II c層下面の標高が27.1m～27.2mである。

塚状・土塁状の高まりは，ビニールゴミ等を含むもので，現代の盛土と判断した。遺構は検出されなかった。遺物は，F-3Gから焼礫2点が出土した。本遺跡のこれまでの調査結果を勘案し，縄文時代のものと判断した。他に土師器1点を地表面で採集した。

調査のまとめ

縄文時代の焼礫2点が出土した。塚状・土塁状の高まりは，現代の盛土と判断した。遺構は検出されなかった。

図版6 内野南遺跡 g 地点



(1) 調査状況



(2) C-8G調査状況



(3) F-5G北西壁土層断面



(4) B-3G南西壁土層断面

7. 小坂橋遺跡 f 地点

遺跡の立地と概要

小坂橋遺跡は、市域の南部、新川低地を東に臨む台地上にあり、標高は24m以下である。

小坂橋遺跡については、過去の調査結果から、石製模造品の工房跡を含む古墳時代中・後期の集落跡であり、権現後遺跡・北海道遺跡・川崎山遺跡とともに、新川西岸の石製模造品の工房群の一角を担う集団の遺跡と捉えることができる。さらに、d地点では、地下式坑を初めとする中・近世の遺構・遺物が検出され、近世に栄えた大和田宿の成立前史に関わる遺跡であることも明らかとなった。

f地点は、遺跡南部の標高23.5m前後の地点である。

調査の方法と経過

調査区の形状に合わせ、2m×5mのトレンチを3箇所、合計30㎡分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成24年9月4日から10日で、4日機材搬入、杭設置、トレンチ設定。5日重機による掘削、トレンチ内精査。5日・7日土層調査、実測記録。10日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

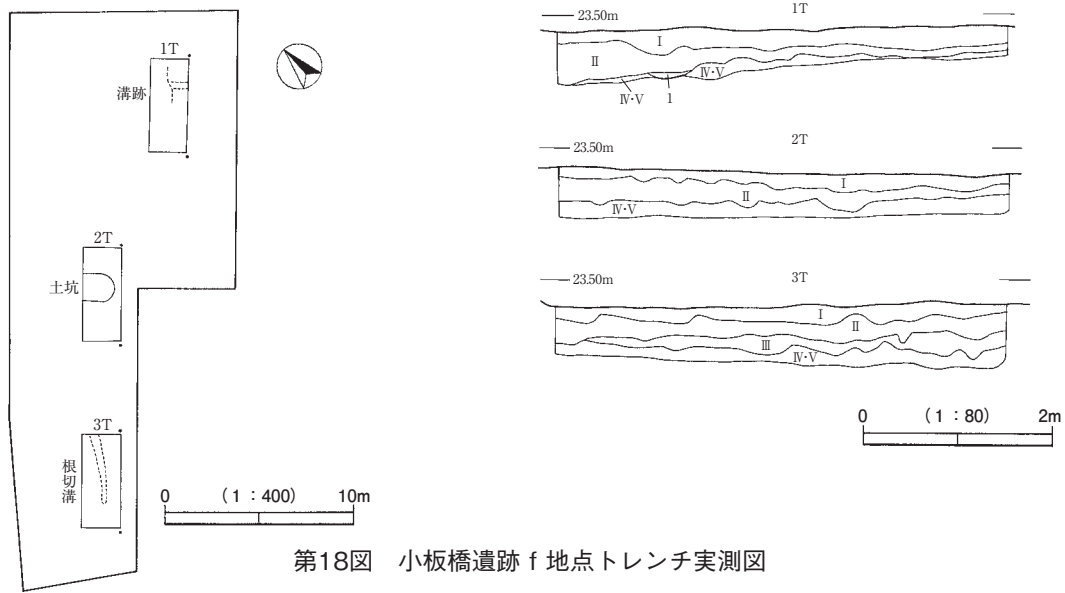
調査の概要

土層は、各トレンチの南東壁を観察した。基本的にⅠ層（表土、7.5YR 3/4 暗褐色土、しまり弱く、可塑性も弱い）、Ⅱ層（7.5YR 3/3 暗褐色土、しまり良いが、可塑性は弱い。径1～3mmの黄色スコリアを多量含む。1T・3Tでは1～3mmの焼土粒子を含み、2Tでは20～50mmのロームブロックを含む）、Ⅲ層（ソ

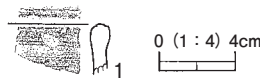


第17図 小坂橋遺跡 f 地点・堰場台遺跡 a 地点位置図

II 各調査の概要



第18図 小板橋遺跡 f 地点トレンチ実測図



第19図 小板橋遺跡 f 地点出土遺物

第5表 小板橋遺跡 f 地点出土遺物

No.	出土地点	器形	部位・状態	計測値 (mm)	○胎土/石材 ●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	3 T	鉢か	口縁部 小片	残存高27	○細砂、赤褐色粒子 ●内) 淡橙色 外) 褐色	口唇上に段と窪みが巡る。内) 横方向ナデ痕顕著。 外) 横方向ナデ痕顕著。	近世 素焼土器

フトローム, 7.5YR 4/4 褐色土, 3 Tのみで検出), IV・V層 (ハードローム, 7.5YR 4/4 褐色土, 赤色・黒色・灰色スコリア及び火山ガラスを含む), 1 (7.5YR 4/3 褐色土, しまり良いが, 可塑性は弱い。1 Tで検出された溝跡の覆土)であった。基本層序の多くは失われ, I層の下にはII層暗褐色土が厚さ0.1m~0.4m堆積し, その下は3 Tではソフトロームが認められたが, 1 T・2 Tではハードロームに達していた。本遺跡 d 地点ではII層暗褐色土・黒褐色土層群が認められたが, 本地点も似た在り方と考えられる。地表面の標高は, 23.3m前後, ソフトロームは22.7m~23.0m, ハードロームは概ね22.9m以下であるが, 1 T側が高く3 T側が低くなっている。

遺構は, 2 Tにおいて短軸1.45m×長軸検出部分1.6mの土坑を検出した。形状や覆土の在り方から, 遺物は無いが縄文時代の陥穴と判断した。1 Tでは溝跡が検出された。硬化面を伴っており埋没の過程で道路として使われたらしい。半分は攪乱されていた。近世・近代の溝跡と判断した。3 Tからもほぼ同じ時代と考えられる根切溝跡を検出した。

遺物は, 3 Tにおいて土器片1点が出土した。近世の素焼土器と判断した。

調査のまとめ

遺構としては, 縄文時代の陥穴1基と近世・近代の溝跡1条を検出した。遺物は近世の素焼土器1点であった。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市遺跡調査会 (2008年) 『千葉県八千代市小板橋遺跡一b 地点埋蔵文化財発掘調査報告書一』

八千代市教育委員会 (2013年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成24年度』 (d 地点確認調査)

八千代市教育委員会 (2013年) 『千葉県八千代市小板橋遺跡 d 地点一宅地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告書一平成24年度』 (d 地点本調査)

図版7 小板橋遺跡 f 地点



(1) 調査状況



(2) 1T土層断面



(3) 2T土層断面



(4) 3T土層断面



(5) 2T遺構検出状況



(6) 出土遺物

8. 持田遺跡 d 地点

遺跡の立地と概要

持田遺跡は、市域の中央やや南寄り、新川東岸の村上地区の台地上にある。西側は新川、北側は相女谷津^{そうめ}によって画された台地上が遺跡で、標高は24m～26mである。本遺跡と交わるように中世の正覚院館跡が存在する。これまでの調査では、古墳時代後期の集落跡、常滑産骨蔵器、銅製香炉等が検出されている。今回の地点は、遺跡の南端付近で東側が高く1m～2mの段差があって西側に向かって低くなる。宅地及び畑地であり、地形は若干改変されているように見受けられた。正覚院館跡にも近く、関連が想定される地点である。

調査の方法と経過

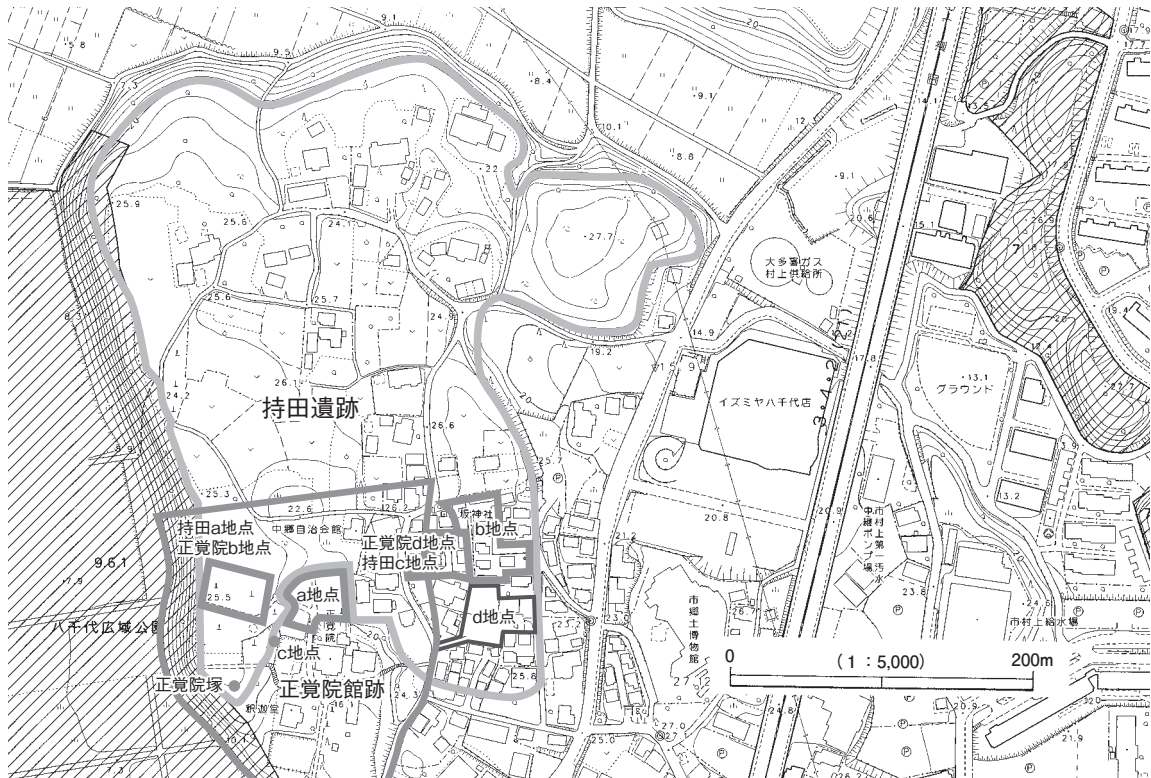
調査区を形状に合わせて10m四方のグリッドで区画し、アルファベットと数字の組合せで大グリッドを表現し、さらにこれを5mごとに4つの小グリッドに分け、1～4の枝番号を付けた。2m×4m等のトレンチを13箇所、合計100㎡分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成24年9月6日から9月18日で、6日機材搬入、杭設置、トレンチ設定。6日～10日人力による掘削。10日・11日重機による掘削、土層調査、実測記録。11日～13日トレンチ内精査。14日・18日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

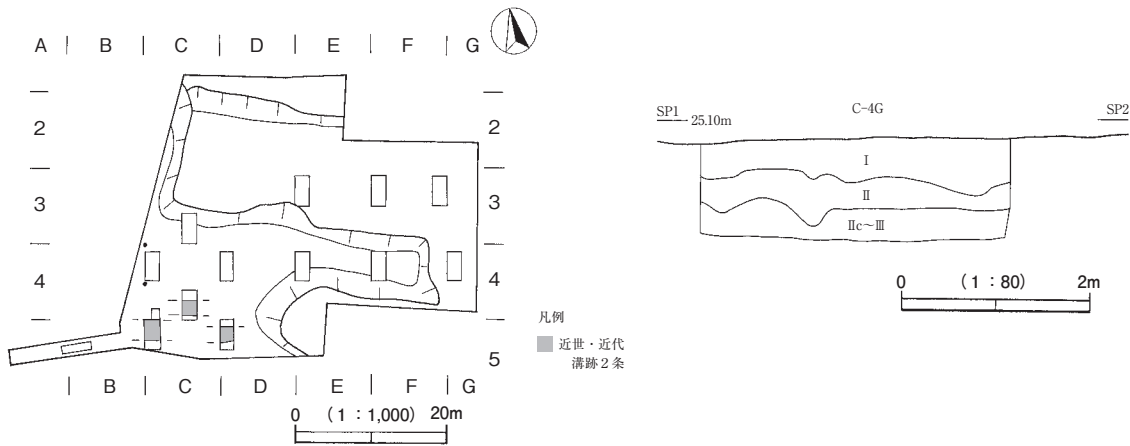
調査の概要

土層の観察は、調査区西端のC-4G西壁で行った。I層（表土、褐色土、硬くしまりあり）、II層（暗褐色土、黒色土・黄色スコリアを含む。しまり弱く、可塑性なし）、IIc～III層（暗黄褐色土、ローム漸移層～ソフトローム、しまりややあり、可塑性弱い）が認められた。基本層序はほとんど見られず、この他のトレンチは攪乱が多かった。

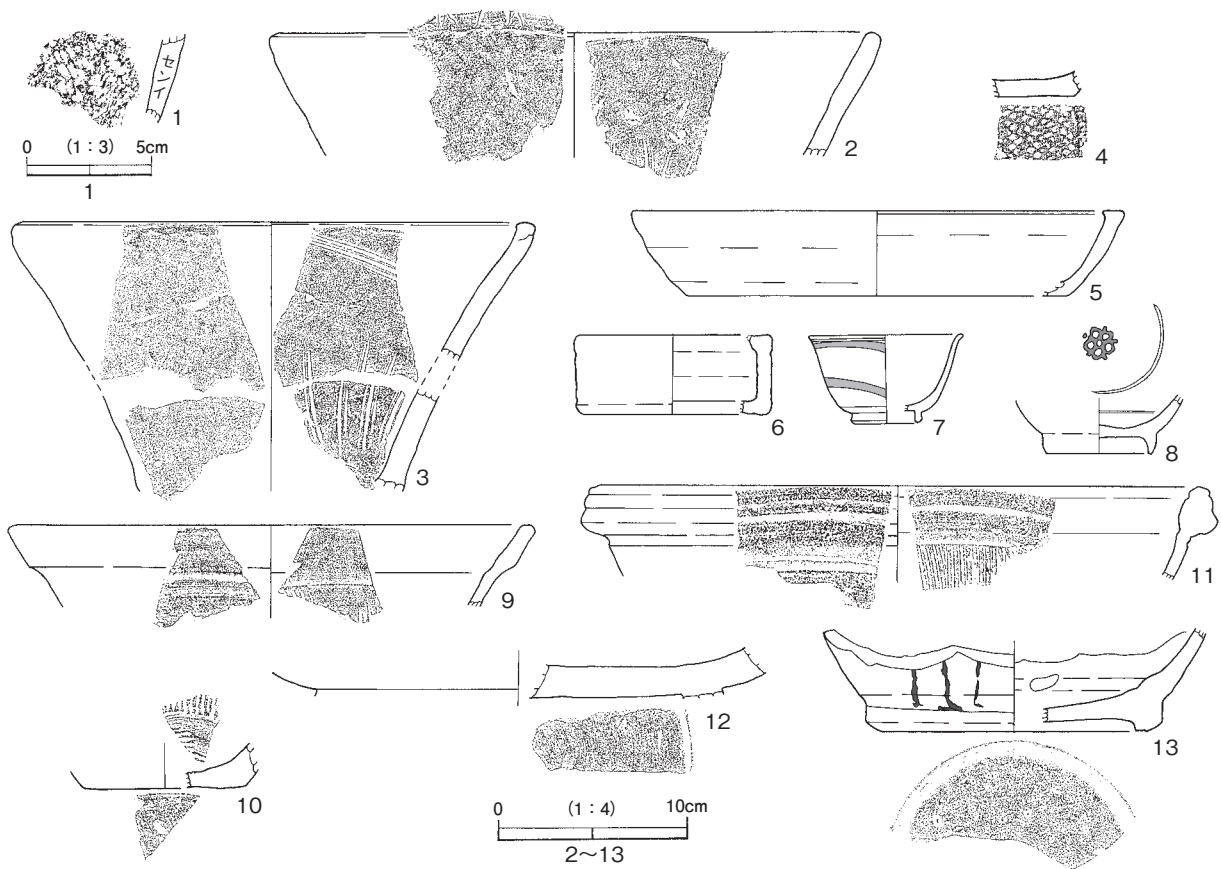
遺構は、調査区南西端で溝跡が検出された。C-4Gの溝跡とC-5GとD-5Gを通る溝跡合計2条である。



第20図 持田遺跡 d 地点位置図



第21図 持田遺跡 d 地点トレンチ実測図



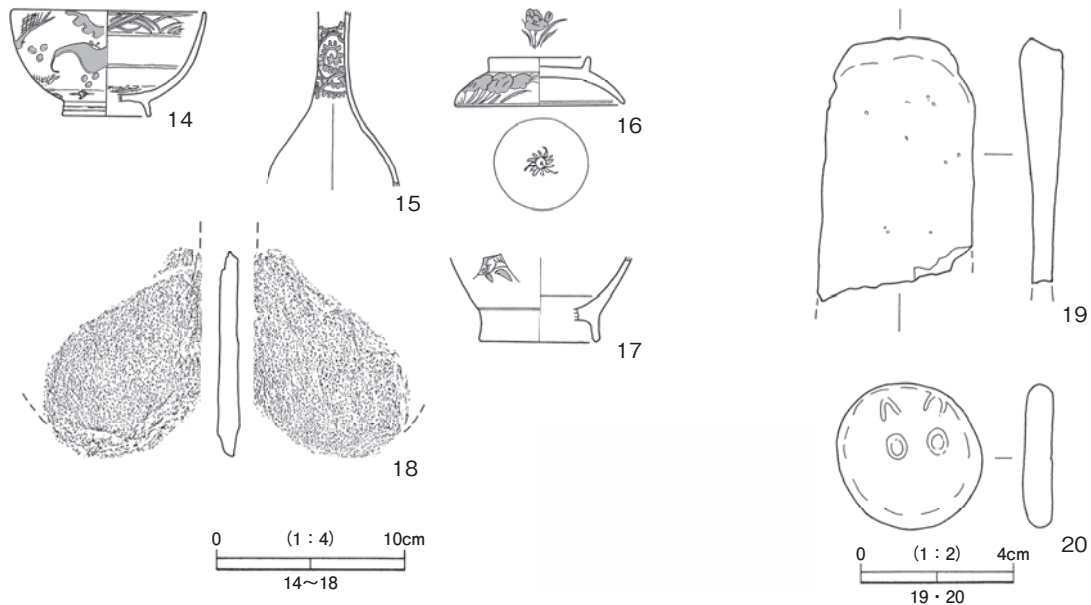
第22図 持田遺跡 d 地点出土遺物 (1)

出土遺物や覆土の状態から近世～近代の溝跡と判断した。

遺物は、陶器58点、磁器41点、瓦質土器16点、素焼土器11点、ガラス製品5点、焼礫4点、須恵器・鉄製品・緑泥片岩・礫片各2点、その他縄文土器・土師器・陶製瓦・砥石・小礫・中礫・巨礫各1点、合計150点が出土した。うち80%以上の121点はC-4Gから出土した。近世～近代の陶磁器等の遺物が中心と考えるが、一部中世に遡る土器もありそうである。20点を抽出して図示した（第22・23図・第6表）。

調査のまとめ

遺構は、近世～近代の溝跡2条を確認した。遺物は近世～近代の陶磁器を主体としていた。一部に中世の遺物が検出され、正覚院館跡の周辺遺跡と捉えることもできる。



第23図 持田遺跡d地点出土遺物(2)

第6表 持田遺跡d地点出土遺物

No.	出土地点	器形	部位・状態	計測値(mm)	○胎土/石材 ●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	D-5G	深鉢	胴部小片	—	○繊維、粗砂 ●内) 淡褐色 外) 褐色 割口) 黒色	内) ナデ。 外) 縄文、不明瞭。	縄文土器 前期黒浜式か
2	C-4G	すり鉢	口縁部	復元口径325 残存高65	○細砂、粗砂 ●黒褐色	内) 横～斜方向ナデ。すり目の端部が見える。 外) ナデ。	瓦質土器
3	D-5G	すり鉢	口縁部2点 底部付近1点	復元口径276 復元底径140 残存高142	○粗砂 ●黒色、灰褐色	内) ナデ。すり目2～3本単位でまばら、口縁付近にも斜方向に入る。外) ナデ。口唇付近に輪積痕。	瓦質土器
4	C-4G	火鉢	底部	残存47×34 厚9	○赤褐色粒子 ●黒褐色 割口) 淡灰赤色、芯は黒色	内) ナデ。 外) 回転印刻の格子文。	瓦質土器
5	D-5G	内耳鍋か	口縁～底部	復元口径260 復元底径202 高45	○粗砂・細砂多、雲母、石英、長石 ●内) 褐色 外) 暗褐色、黒色	内) 横方向ナデ。口唇部内側に肥厚する。 外) 横方向ナデ。ロクロ目は不明瞭。	素焼土器
6	C-4G	器台か	口縁付近～ 底部 約1/4	復元口径104 復元底径100 高42	○粗砂、雲母、赤褐色粒子、長石細礫 ●内) 灰色、灰褐色 外) 淡褐色、橙色	内) 横方向ナデ痕顕著。 外) 横方向ナデ。	素焼土器
7	C-4G	碗	口縁～底部 高台付1/4弱	復元口径82 復元高台径38 高47	○緻密 ●淡灰色(施釉)	内) 底面に文様の端部が見える。 外) 横方向の青色線3条。口唇上) 暗褐色	陶器
8	C-4G	鉢か	底部 高台付	復元高台径56 残存高31	○緻密 ●灰白色(施釉)	内) 染付、底面に梅花文か。器面にひび・穴あり。 高台端部が所々欠損。	陶器
9	C-4G	すり鉢	口縁部	復元口径276 残存高43	○石英細礫少 ●褐色・淡褐色(施釉) 割口) 白色	内) 横方向ナデ。段、すり目の端部が見える。 外) 口唇肥厚、横方向ナデ。	陶器 10)に似る
10	D-5G	すり鉢	底部	復元底径86 残存高24	○細礫 ●褐色(施釉) 割口) 白色	内) すり目間隔2ミリ。 外) ナデ。	陶器 9)に似る
11	C-4G	すり鉢	口縁部	復元口径314 残存高50	○粗砂、石英細礫 ●暗褐色(施釉)	内) 口唇付近に沈線。すり目間隔3ミリ。 外) 口唇肥厚、沈線状に2箇所がくぼむ。	陶器 重厚なつくり
12	C-4G	鉢か皿	底部 高台付	復元高台径216 残存高27	○石英細礫 ●内) 淡灰緑色(施釉) 底外) 白色	内) 褐色の文様の端部が見える。 外) 高台～底面は無軸。体部は内面と似た釉葉。	陶器 重厚なつくり
13	C3-4G	甕	底部 高台付	復元高台径158 残存高55	○細礫 ●内) 褐色(施釉) 外) 褐色(施釉) 底外) 灰白色	内) 重ね積み焼きの痕跡2箇所。 外) 高台～底面は無軸。	陶器
14	C-4G	碗	口縁～底部 高台付1/4弱	復元口径102 復元高台径46 高56	○緻密 ●白色(施釉)	内) 染付。 外) 染付。	磁器
15	C-4G	鶴首瓶	頸上～ 胴上部	復元頸部径16 復元胴部最大径70 残存高92	○緻密 ●内) 橙白色 外) 白色(施釉)	内) 横方向ナデ。 外) 染付頸部に蛸唐草文、胴部にも文様端部見える。	磁器
16	C-4G	蓋	縁の一部欠損	口径90 つまみ径54 高26	○緻密 ●青白色(施釉)	内) 染付、花文か円文。 外) 染付、花・葉文。	磁器
17	C-4G	鉢か	底部 高台付	復元高台径64 残存高46	○緻密だが細礫が見える ●淡青灰色(施釉)	内) 染付、線1条、底面に文様の端部が見える。 外) 染付、植物文の一部が見える。線文1条。	磁器
18	D-5G	板碑片か	基部か	185×80 厚9～12	○緑泥片岩 ●青灰色	一辺が直線に整形されている。 図の左の面は平滑、右の面はやや凹凸がある。	
19	C-4G	砥石		69×41 厚5～11	○緻密な石。流紋岩か ●灰褐色、一部赤色味。	使い込まれて薄くなっている。 主に表裏2面を使用している。	
20	C-4G	おはじき	完形	39×39 厚7.5	○ガラス、内部に細かい気泡あり。 ●黄～緑～茶色味を帯びる	平坦な面とやや丸味を帯びる面があり、前者の面には細い引っかかり沈線があり、後者の面にはく形・楕円形の凸部がある。	

本遺跡に関する調査報告書等

八千代市教育委員会(1995年)『平成6年度八千代市埋蔵文化財調査年報』(a地点)

八千代市教育委員会(2005年)『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度』(c地点)

八千代市教育委員会(2006年)『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成17年度』(c地点その2)

図版8 持田遺跡 d 地点 (1)



(1) 調査状況 - 1 -



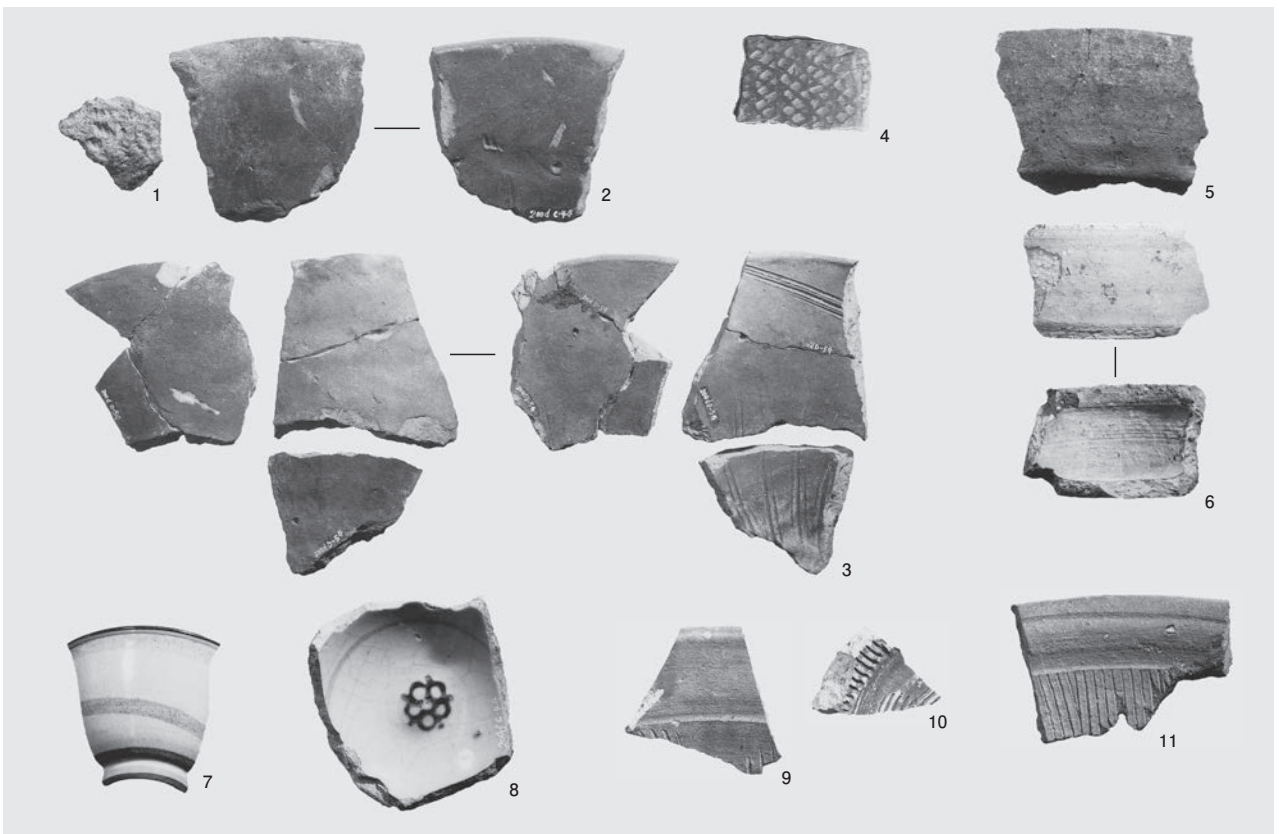
(2) 調査状況 - 2 -



(3) C-4G土層断面

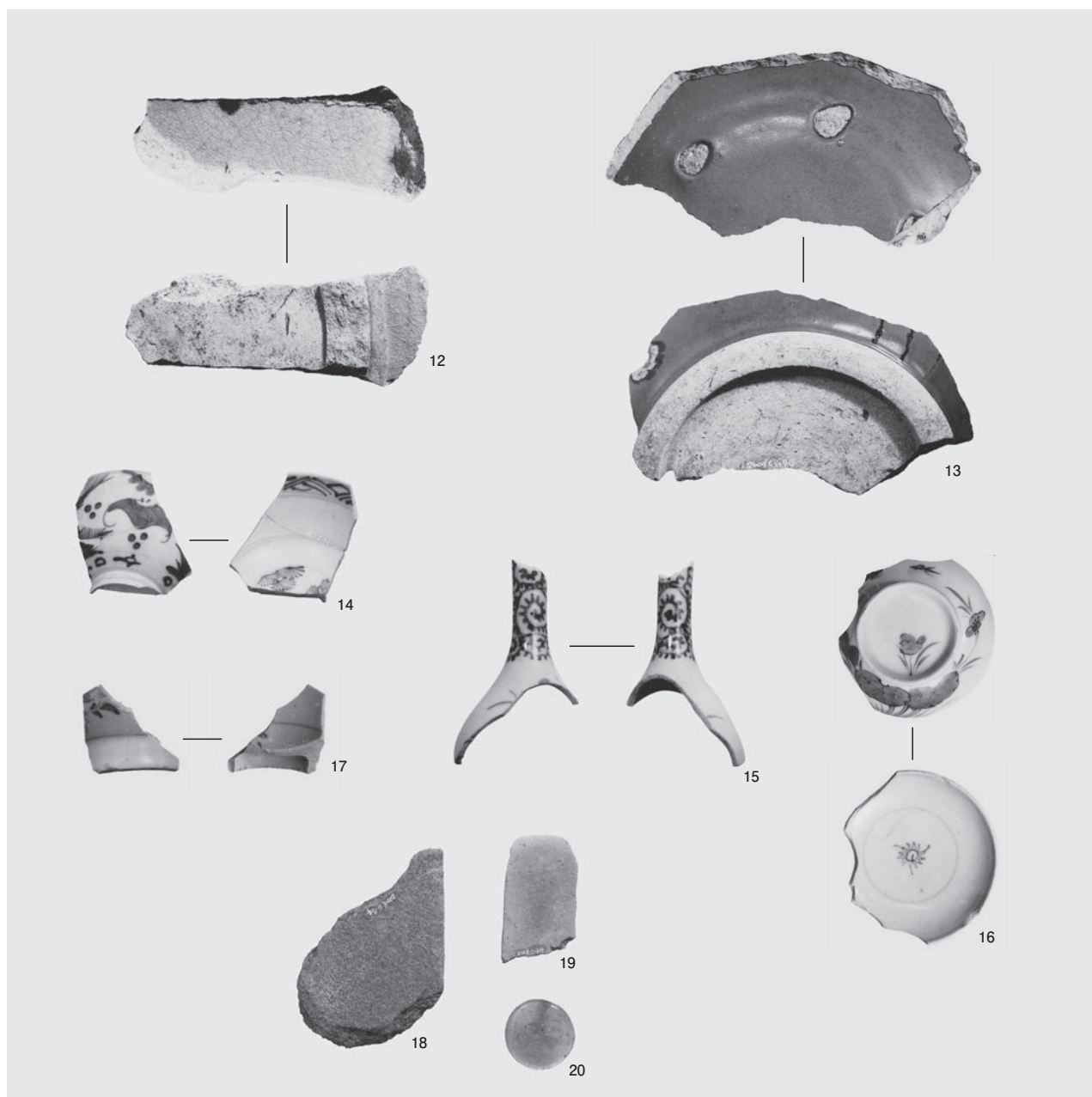


(4) C-44G完掘状況



(5) 出土遺物 - 1 - (番号は第22図と同じ)

図版9 持田遺跡 d 地点 (2)



(6) 出土遺物 - 2 - (番号は第22図・第23図と同じ)

9. 新東原遺跡 k 地点

遺跡の立地と概要

新東原遺跡は、市域南東部、佐倉市との市境付近に所在する。新川の上流に当たる勝田川を南～南西に臨む台地上及び一部低台地が遺跡範囲である。

本遺跡においては、これまでに10地点で調査が行われ、旧石器時代の遺物、縄文時代前期・後期の遺構・遺物、奈良・平安時代の方形周溝状遺構、さらに旧陸軍の射撃演習に伴うと推測される砲弾の一部などが検出されている。今回の地点は、c地点・i地点に隣接する標高16m～19m、南西が高く北東に向かって低くなる斜面地の山林である。

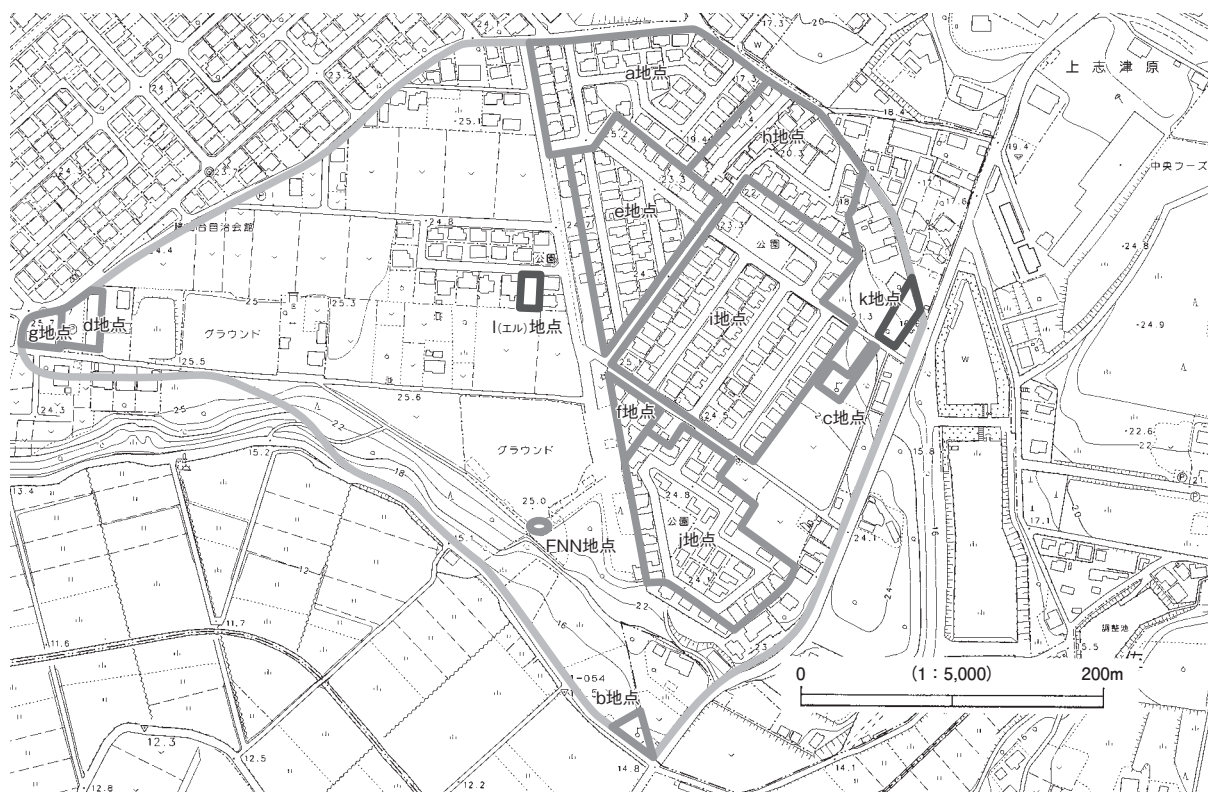
調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて5m四方に区画し、アルファベットと数字の組合せでトレンチ名を表現した。2m×3～4mのトレンチを9箇所、合計78m分設定し、人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

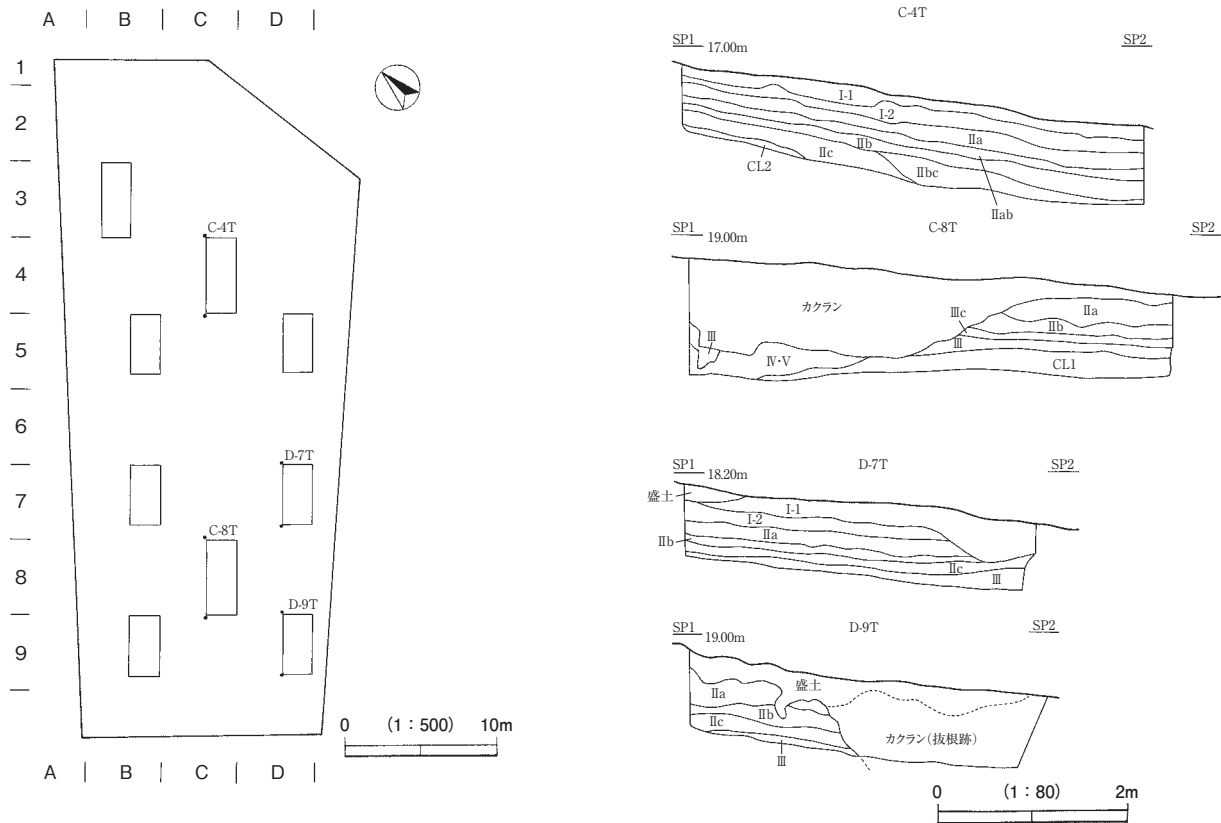
調査期間は、平成24年11月7日から11月15日で、7日機材搬入、草刈り。8日杭設置、トレンチ設定。9日重機による掘削、トレンチ内精査。12日・13日土層調査、実測記録。15日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

土層観察はトレンチの北西壁で行った。I-1層（表土, 7.5YR 3/3 暗褐色土, しまり・可塑性ともになし）、I-2層（旧表土か, 7.5YR 3/3 暗褐色土, しまり・可塑性ともに弱い）、II a層（7.5YR 3/2 黒褐色土, 腐植土層, しまり・可塑性ともに弱い。径0.5～2mmの黄色スコリアを含む）、II b層（7.5YR 3/3 暗褐色土, 褐



第24図 新東原遺跡 k 地点・I(エル) 地点位置図



第25図 新東原遺跡k地点トレンチ実測図

色土が斑状に入る，新期富士テフラ層），IIc層（7.5YR 4/3 褐色土，ローム漸移層），III層（7.5YR 4/4 褐色土，ソフトローム），IV・V層（7.5YR 4/6 褐色土，ハードローム，径1mmの褐色・黒色・灰色スコリアを多量含む）という比較的良好な基本層序を確認した。D-9T・C-8Tには抜根跡と考えられる大規模な攪乱があった。斜面下方に当たるC-4Tには，IIab層（7.5YR 2/2・3/2 黒褐色土，褐色土が斑状に入る），IIbc層（7.5YR 3/3 暗褐色土，褐色土が斑状に入る，谷に堆積する土と考えられる）を認識した。特徴的なのは粘土層の存在であった。C-8Tの最下層はIII層及びIV・V層の下，標高17.8m以下に粘土層CL1（7.5YR 5/3 において褐色の粘土）があり，C-4TではIIc層の下，標高15.8~16.2mに砂を含む粘土層CL2（7.5YR 5/6 明褐色の粘土，褐色土が雲状に入る）が検出された。標準層序における粘土質の土は，XI層武蔵野ローム（粘土質の灰褐色ローム）であり，この層はIII層から約1.5m以上の深さにある。今回の調査の粘土層はXI層とは異なるものかもしれないが，標準層序とは明らかに異なる様相を示している。

遺構・遺物とも検出されなかった。

調査のまとめ

遺構・遺物は検出されなかった。土層の観察所見として，粘土層の在り方が標準層序とは異なっていることが特筆される。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会（2003年）『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度』（a地点確認調査）

八千代市遺跡調査会（2004年）『千葉県八千代市新東原遺跡 a 地点発掘調査報告書—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査—』

（a地点本調査）

図版10 新東原遺跡 k 地点



(1) 調査状況



(2) C-4T土層断面



(3) C-8T土層断面



(4) D-7T土層断面



(5) D-9T土層断面

八千代市教育委員会 (2004年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成15年度』 (b地点, c地点)

八千代市教育委員会 (2005年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度』 (d地点)

八千代市教育委員会 (2006年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成17年度』 (e地点, f地点)

八千代市教育委員会 (2007年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成18年度』 (g地点)

八千代市教育委員会 (2008年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成19年度』 (h地点)

八千代市教育委員会 (2010年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成21年度』 (i地点)

八千代市教育委員会 (2011年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成22年度』 (j地点)

10. 堰場台遺跡 a 地点

遺跡の立地と概要

堰場台遺跡は、市域の南部、高津川を南に臨む台地上に所在する。

本遺跡は、I章に記したように、堰場台古墳として箱式石棺1基が発見・調査された住宅に隣接しているため、試掘を実施したところ、同古墳の周溝のみでなく、竪穴住居跡を検出したことによって、同古墳及び新たな遺跡として周知することになったものである。標高24m前後の社宅跡地で、鉄筋コンクリート造り建物3棟や遊具・テニスコートなどが設置されていた。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて10mごとに区画し、アルファベットと数字の組合せで大グリッドを表現し、さらにこれを5mごとに4つの小グリッドに分け、1～4の枝番号を付けた。2m×5mのトレンチを大グリッドに1箇所を原則として配置し、適宜長さを変えるなど調整し合計729㎡分を設定した。これらを人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成24年12月26日から平成25年1月21日で、12月26日機材搬入、環境整備、杭設置、トレンチ設定。27日トレンチ設定、人力による掘削。1月7日～10日人力による掘削、重機による掘削、土層調査、実測記録。7日～17日トレンチ内精査。18日トレンチを追加設定、掘削、精査。16日～21日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

土層の観察所見としては、I-1層(表土、黒色土とロームが粗く混じり合う)、I-2層(旧表土、暗褐色土、しまりが弱い)、IIb層(暗褐色土、褐色土を斑状に含む、新期富士テフラ層)、IIc層(褐色土、ローム漸移層)が認められたが、攪乱が多く、土層の状態は全般に不良であった。しかし、地表下0.6m～0.9mの深さで遺構を検出した。D-10Gの遺構覆土1は暗褐色土でロームを少量含み、しまり強く可塑性は無かった。古墳時代の小型の竪穴住居跡と判断した。堰場台古墳の周溝を検出するために任意に設定したAトレンチで、予想通り周溝と見られる溝跡を検出した。覆土2は黒褐色土、ロームを微量含み、しまり・可塑性ともに弱い。遺構確認面の標高は23.2m～23.5mであった。

縄文時代の竪穴住居跡1軒、陥穴1基、土坑4基、古墳時代の竪穴住居跡3軒、古墳周溝1条を確認した。

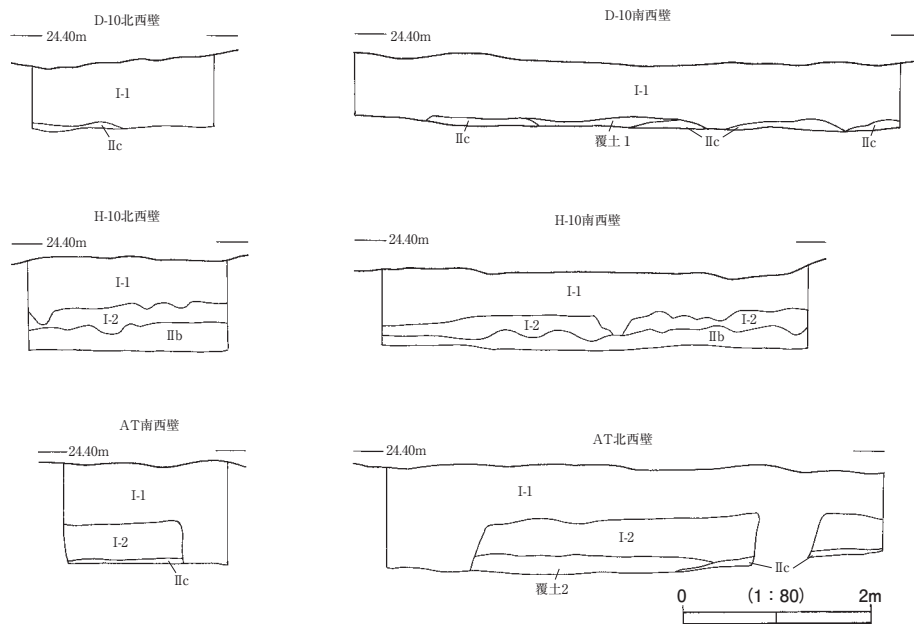
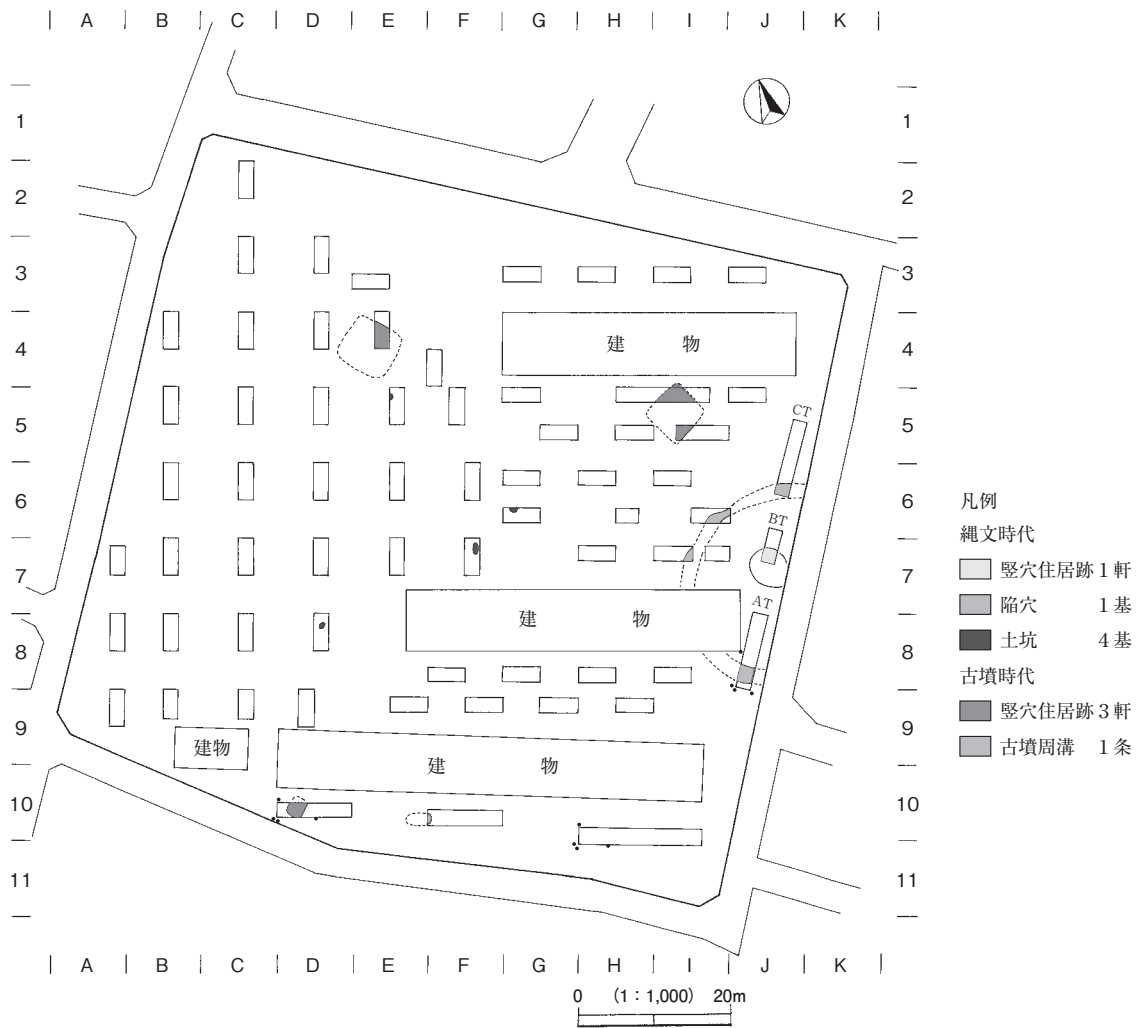
遺物は、40点出土した。内訳は土師器30点、縄文土器4点、礫片3点、剥片1点等である。他に地表面採集品が3点である。これらから7点を抽出し図示した。

調査のまとめ

攪乱は激しかったが、遺構として竪穴住居跡や堰場台古墳の周溝等を検出し、遺物として縄文土器や古墳時代の土師器を確認することができた。

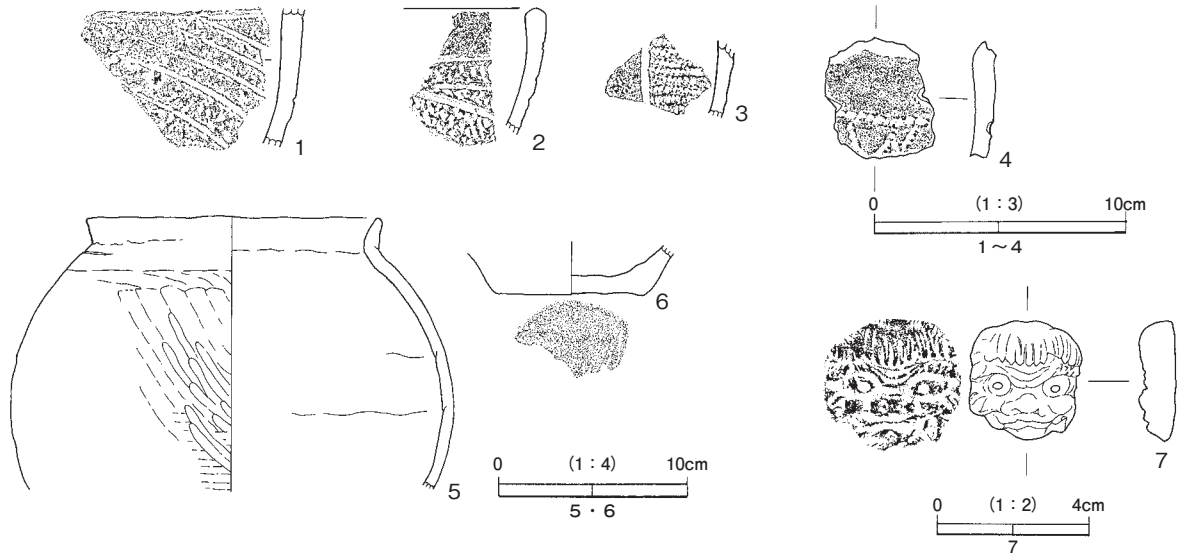
本遺跡に関する文献

八千代市教育委員会(2002年)『千葉県八千代市市内出土人骨分析委託報告書』(堰場台古墳)



第26図 堰場台遺跡 a 地点トレンチ実測図

II 各調査の概要



第27図 堰場台遺跡a地点出土遺物

第7表 堰場台遺跡a地点出土遺物

No	出土地点	器形	部位・状態	計測値 (mm)	○胎土/石材 ●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	B	深鉢	胴上部	—	○細砂, 粗砂 ●内) 灰褐色 外) 淡褐色, 淡橙褐色	内) 横方向ミガキ。外) 地文は粗い縄文か、不明瞭。斜方向条線, 横方向沈線も見える。焼成粘土層付着。	縄文土器 後期 加曾利B式粗製
2	B	鉢か深鉢	口縁部	—	○細砂 ●褐色	内) 横方向ミガキ。外) 口縁部に無文帯, 横方向沈線の下に地文は押引文か。横・斜方向の沈線。	縄文土器 後期 加曾利B式精製
3	B	深鉢か	胴部	—	○粗砂, 細礫 ●内) 暗褐色 外) 黒褐色	内) 横～斜方向ミガキ。 外) L R 磨消縄文, 縦方向沈線, 無文部ミガキ。	縄文土器 後期 中葉～後葉精製
4	H-10G	土器片錘	胴上部 屈曲部	47×39 厚7～9	○粗砂, 細礫, 雲母 ●内) 灰褐色 外) 暗褐色	内) 横方向ナデ。外) 押引文。 抉りは2箇所明瞭。割口は研磨されてない。	縄文土器 中期 阿玉台式
5	I-5-4G	甕 胴球形	口縁～ 胴下部	復元口径156 復元胴部 最大径234 残存高144	○粗砂多 ●内) 暗褐色, 橙褐色 外) 暗褐色, 橙褐色, 褐色	内) 横方向ナデ, 輪積痕, 肌荒れ。 外) 横方向ナデ, 横～斜方向ヘラ削り・ミガキ。	土師器
6	I-5-4G	甕	底部	復元底径76 残存高27	○粗砂, 細礫 ●内) 黒褐色 外) 褐色, 暗褐色	内) ナデ, 凹凸あり。 外) ナデ 底外) ヘラ削り。	土師器
7	表採	泥面子 型抜き	完形	31×29 厚7～9.5	○緻密 ●表) 淡褐色, 淡橙色 裏) 淡橙色	表) 顔面。鬼か。 裏) ゆるやかな凹凸あり。指紋あり。	

図版11 堰場台遺跡a地点 (1)



(1) 調査状況 - 1 -



(2) 調査状況 - 2 -

図版12 堰場台遺跡 a 地点 (2)



(3) H-10G土層断面



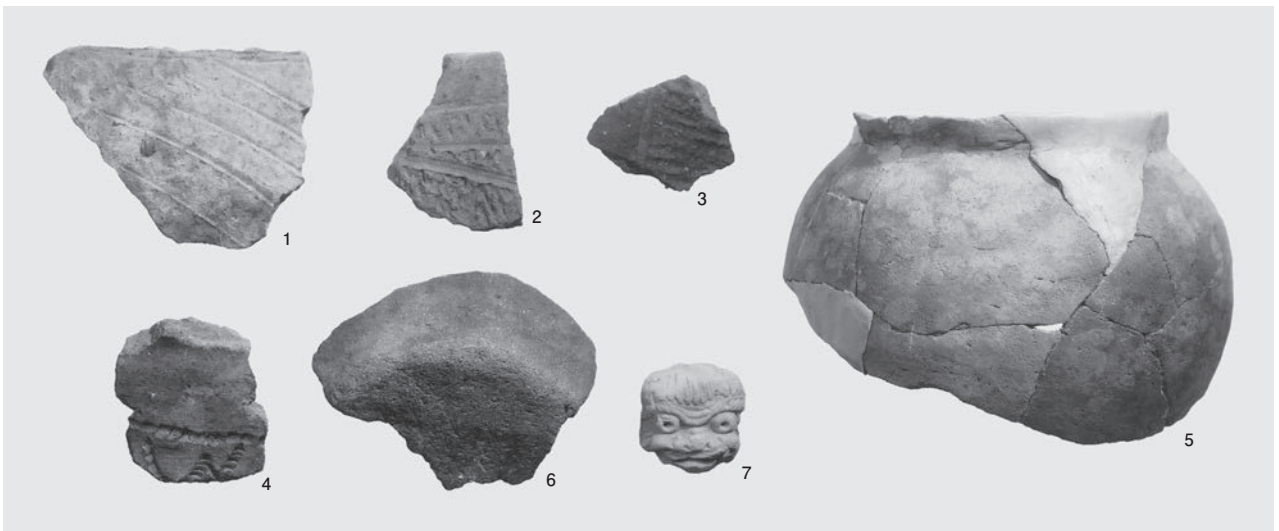
(4) AT遺構検出状況



(5) D-10G遺構検出状況



(6) E-4-3G遺構検出状況



(7) 出土遺物 (番号は第27図と同じ)

11. 北裏畑遺跡 e 地点

遺跡の立地と概要

北裏畑遺跡は、市域の南部、国道296号線（成田街道）の北側に存在し、新川西岸の台地上、標高20～25mに立地する。遺跡の南部は近世に栄えた大和田宿の付近に当たる。遺跡中央西寄りの a 地点では、近世以降の遺物が出土し、その南に隣接する c 地点では近世の土坑を検出した。遺跡南東部の b 地点では、縄文時代陥穴 1 基、近世土坑 3 基、溝状遺構 2 条を検出した。遺跡北部の d 地点では、縄文時代の陥穴を 1 基検出し、石鏃・泥面子を採集した。

今回の地点は、d 地点の西方、川崎山遺跡との境界に当たる標高23～24mの台地上平坦面である。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて 5 m 四方に区画し、アルファベットと数字の組合せでトレンチ名を表現した。2 m × 4 ～ 5 m のトレンチを 5 箇所、合計 44 m² 分設定し、人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成25年1月18日から25日で、18日機材搬入、杭設置、トレンチ設定、21日重機による掘削、トレンチ内精査。21日・22日土層調査、実測記録。25日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

調査区は平坦であるが、西に向かって若干低くなる地形で、東側の C-5T の地表面の標高は 24.2 m ～ 24.3 m、C-3T では 23.8 m ～ 24.1 m であった。土層観察はトレンチの北東壁で行った。I-1層（表土、7.5YR 3/4 暗褐色土、しまり・可塑性ともに弱い）、I-2層（表土、7.5YR 3/3 暗褐色土、しまり・可塑性ともに弱い）、I-3層（7.5YR 4/4 褐色土・3/3 暗褐色土、ローム・ロームブロックを主とする埋土）、II-1層（7.5YR 3/2 黒褐色土、C-3T では通路として利用されていたため硬化している）、II-2層（7.5YR 3/2 黒褐色土、焼土粒子・炭化材片をまばらに含み、径 1 ～ 5 mm の黄色スコリアを含む）、II-3層（7.5YR 3/2・2/2 黒褐色土・4/4 褐色土が混じり合う、耕作土か）、II b 層（7.5YR 3/3 暗褐色土、褐色土が斑状に入る、新期富士テフラ層）、II c 層（7.5YR 4/3・4/4 褐色土、ローム漸移層）、III 層（7.5YR 4/4 褐色土、ソフトローム）という層序を確認した。

遺構は、C-3T で溝跡を検出した。幅 0.7 ～ 0.9 m、深さは 0.3 m 前後、覆土は 7.5YR 2/2 黒褐色土で壁際にはロームが混じり、しまりは弱かった。覆土から近世のかわらけ 1 点が出土した。近世～近代の溝跡と判断した。遺物は他に C-5T から素焼土器の細片が 1 点出た。かわらけを図示した。

調査のまとめ

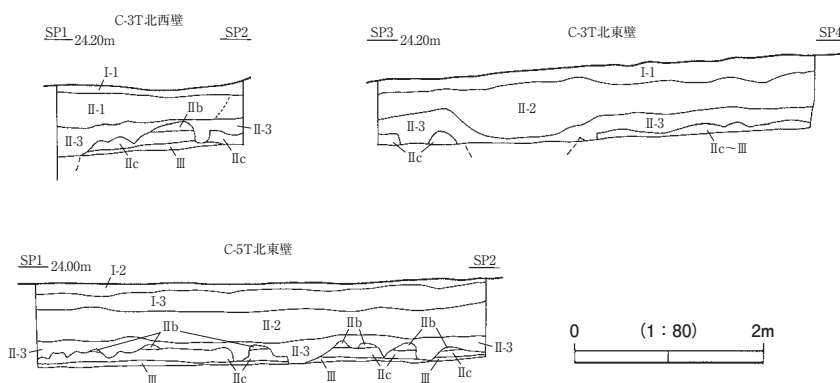
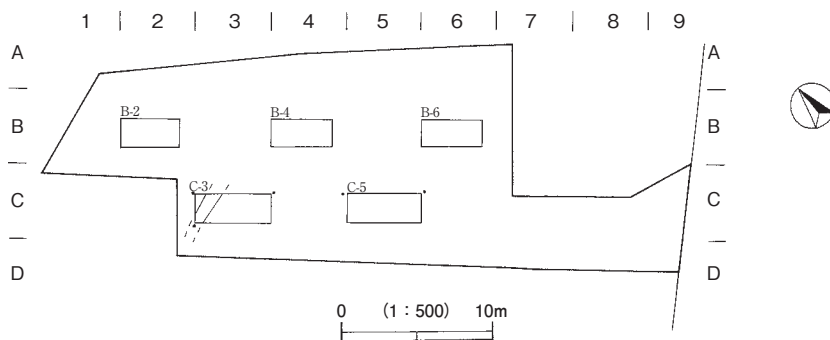
近世～近代の溝跡 1 条とかわらけ等を検出した。

本遺跡に関する調査報告書

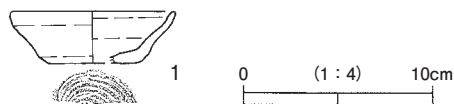
八千代市教育委員会（2002年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』（a 地点）

八千代市教育委員会（2008年）『千葉県八千代市逆水遺跡 f 地点ほか—不特定遺跡発掘調査報告書 V—』（b 地点）

八千代市教育委員会（2013年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成24年度』（c 地点・d 地点）



第28図 北裏畑遺跡 e 地点トレンチ実測図



第29図 北裏畑遺跡 e 地点出土遺物

第8表 北裏畑遺跡 e 地点出土遺物

No	出土地点	器形	部位・状態	計測値 (mm)	○胎土/石材 ●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	C-3G	小碗	口縁～底部 約 1/4	復元口径89 復元底径48 高27	○雲母, 細砂, 粗砂 ●(内) 淡褐色 外) 淡褐色, 褐色	ロクロ成形, 内)横方向ナデ。外)化粧土のような焼成粘土付着。 横方向ナデ。底外) 糸切痕。	かわらけ

図版13 北裏畑遺跡 e 地点



(1) 調査状況 - 1 -



(2) 調査状況 - 2 -



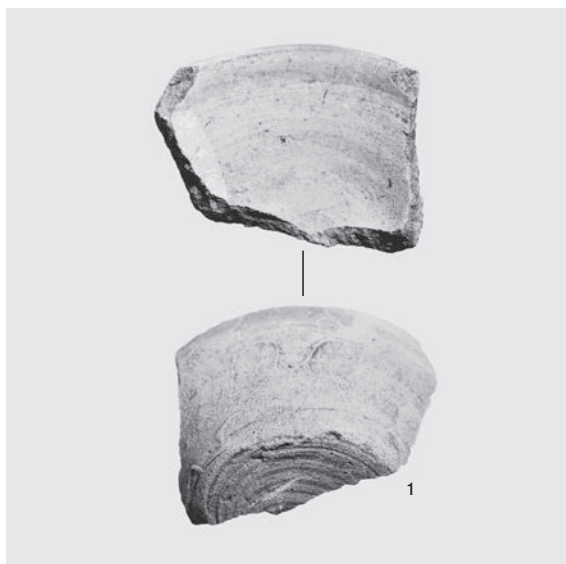
(3) C-3T北西壁土層断面



(4) C-3T北東壁土層断面



(5) C-5T土層断面



(6) 出土遺物

12. 上高野白幡遺跡 a 地点

遺跡の立地と概要

上高野白幡遺跡は、市域東部、東を高野川（あるいは小竹川）の谷津（毘沙谷津）に、北を森下谷津に、西を家（の）下谷津によって画された、標高20～26mの台地上に所在する。

本遺跡においては、これまでに県道建設に先行して（財）千葉県教育振興財団によって発掘調査が行われ、弥生時代中期の集落跡が検出されている。

市としては今回が本遺跡での初めての調査である。今回の地点は遺跡中央部の標高24mの平坦地である。砂利敷きの駐車場のようになっており、一部谷の埋め立て地と考えられ、地形は改変されていると予想された。

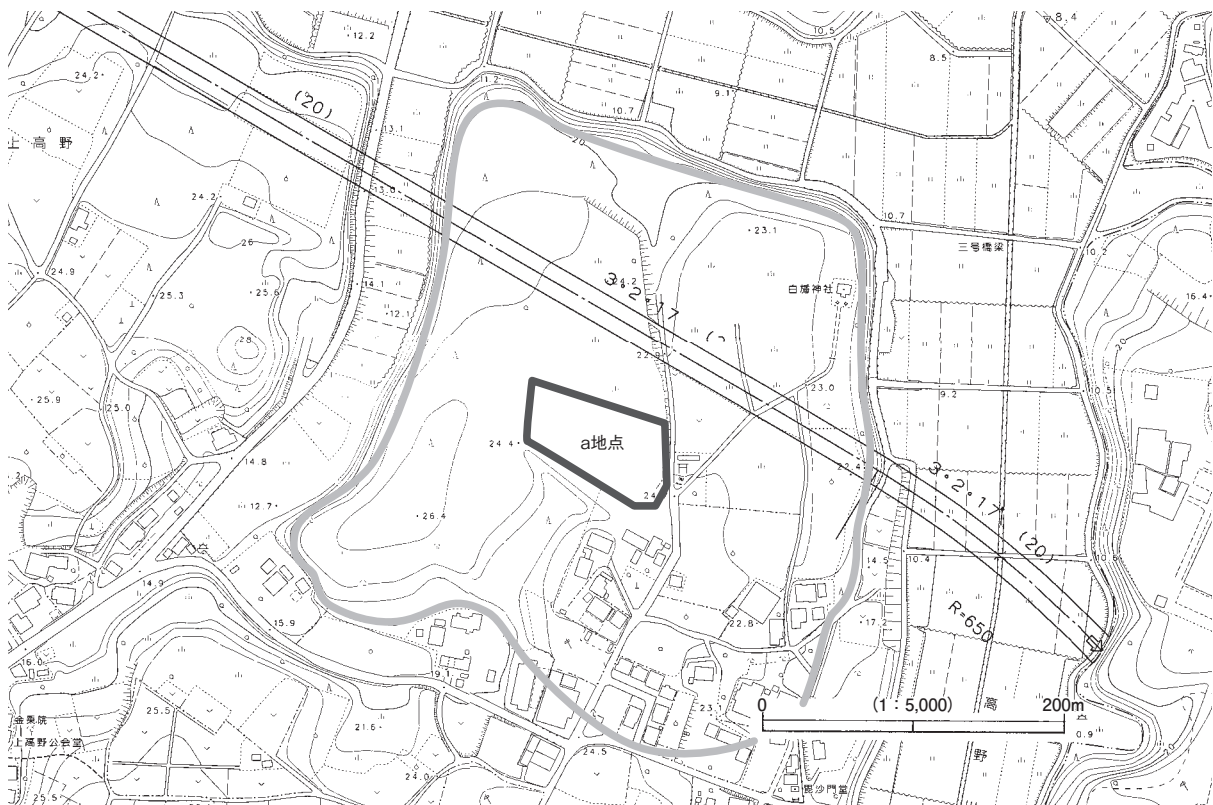
調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて10mごとに区画し、アルファベットと数字の組合せで大グリッドを表現し、さらにこれを5mごとに4つの小グリッドに分け、1～4の枝番号を付けた。2m×5mのトレンチを大グリッドに1箇所を原則として配置し、45箇所合計450㎡分を設定した。これらを人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成25年3月14日から3月26日で、14日機材搬入、環境整備、杭設置、トレンチ設定。15日～22日重機による掘削、トレンチ内精査。18日～25日土層調査、実測記録。22日～26日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

A-2G及びA-10Gにおいて地山を検出しようとしたが、いずれも3.5mの深さまで掘っても盛土・埋土が続き、地山の検出には至らなかった。その他のトレンチにおいても1.5mの深さでは地山に至らなかった。土層の観察所見は、調査区西部のC-2G・C-3Gの北壁・西壁の土層を示した。I-1（表土の碎石）、I-2（黄



第30図 上高野白幡遺跡 a 地点位置図

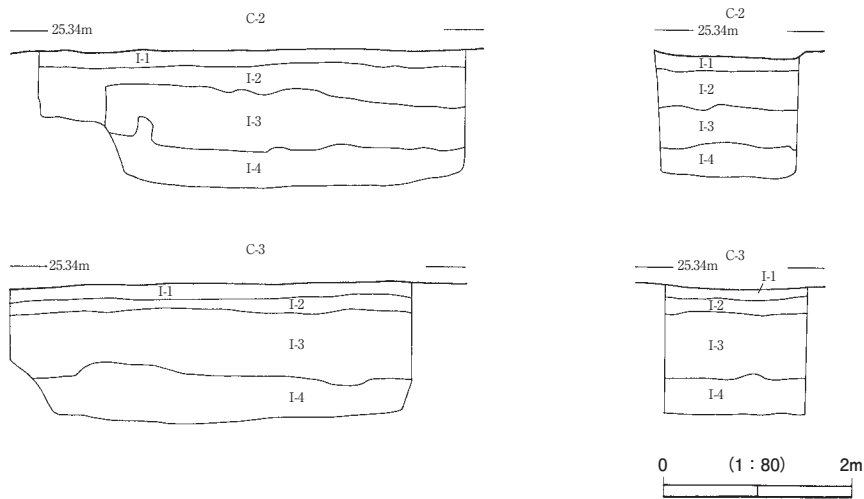
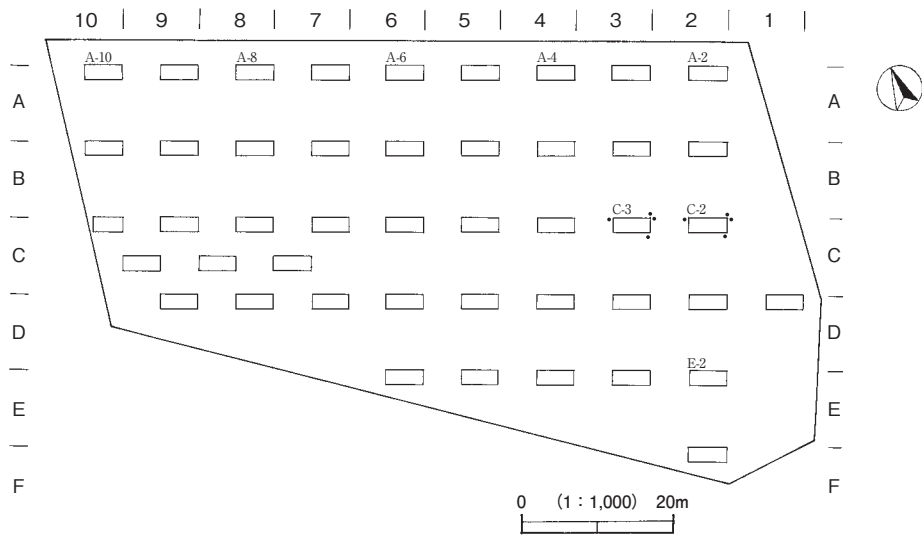
II 各調査の概要

褐色土，ロームの盛土)，I-3（黄褐色土，暗褐色土が混じる。ロームの盛土)，I-4（黒褐色土，白色粘土が混じる。コンクリートブロック等が混じる）という状況であった。

遺構・遺物とも検出されなかった。

調査のまとめ

土層の遺存状態は不良で，遺構・遺物とも検出されなかった。



第31図 上高野白幡遺跡a地点トレンチ実測図

図版14 上高野白幡遺跡 a 地点



(1) 調査状況 - 1 -



(2) 調査状況 - 2 -



(3) A-2G掘削状況



(4) A-10G掘削状況



(5) C-2G北壁土層断面



(6) C-2G東壁土層断面

13. 新東原遺跡 1 (エル) 地点

遺跡の立地と概要

本遺跡の立地については、9. k地点の項を参照されたい。

今回の1地点は、遺跡の中央部に位置する。標高は25m前後の平坦な畑地である。

調査の方法と経過

建設予定住宅の基礎部分避けて、2m×5mのトレンチを任意に3箇所合計30m分設定し、人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成25年3月18日から3月21日で、18日機材搬入、杭設置、トレンチ設定、環境整備、人力による掘削、19日・21日重機による掘削・埋め戻し、トレンチ内精査、土層調査、実測記録。21日機材を撤収し、調査を終了した。

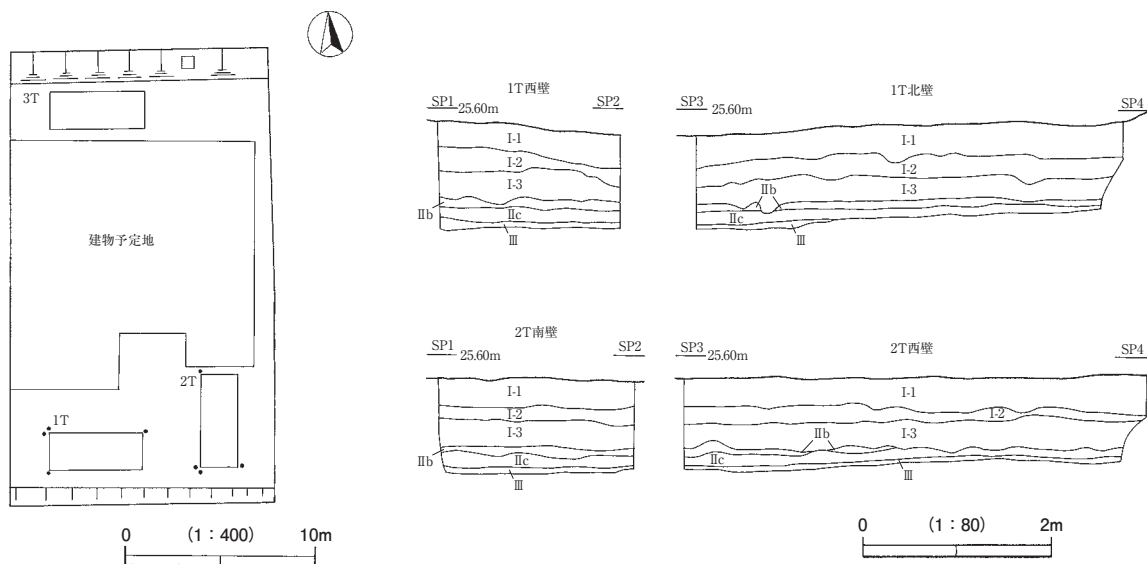
調査の概要

土層の観察所見としては、調査区南部の1T・2Tでは、I-1層（表土、7.5YR3/3暗褐色土、しまり・可塑性ともに非常に弱い、耕作土）、I-2層（7.5YR3/3暗褐色土・4/4ローム褐色土が混じり合う、しまり強く、可塑性弱い、碎石をまばらに含む）、I-3層（7.5YR3/3暗褐色土、径0.5～5mmの黄色スコリアを多量含む。旧表土か）、IIb層（7.5YR4/3褐色土・4/4褐色土が斑状に入る、径1～3mmの黄色スコリアを含む。新期富士テフラ層）、IIc層（7.5YR4/3・4/4褐色土、径3～5mmの黄色スコリアをまばらに含む。ローム漸移層）、III層（7.5YR4/4褐色土、ソフトローム）という層序を確認した。地表面標高は25.3m～25.5mであるが、上層のI-1・2層に当たる厚さ0.4m～0.6mは盛土と判断した。III層上面の標高は概ね24.4mで一定していた。

遺構・遺物とも検出されなかった。

調査のまとめ

遺構・遺物とも検出されなかった。



第32図 新東原遺跡 1 地点トレンチ実測図

図版15 新東原遺跡 1 地点



(1) 調査状況



(2) 1T西壁土層断面



(3) 1T北壁土層断面



(4) 2T南壁土層断面



(5) 2T西壁土層断面



(6) 3T完掘状況

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよし しなしいせきはつちようさほうこくしょ へいせい25ねんど							
書名	千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成25年度							
副書名	仲西遺跡 a 地点 勝田大作遺跡 b 地点 麦丸遺跡 i 地点 川崎山遺跡 r 地点 内野南遺跡 f 地点 内野南遺跡 g 地点 小板橋遺跡 f 地点 持田遺跡 d 地点 新東原遺跡 k 地点 堰場台遺跡 a 地点 北裏畑遺跡 e 地点 上高野白幡遺跡 a 地点 新東原遺跡 l 地点							
編著者名	常松成人							
編集機関	八千代市教育委員会							
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138番地 2 TEL 047 (483) 1151代表							
発行年月日	平成26年 3 月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかにし いせきえい ちてん 仲西遺跡 a 地点	やち よだいにし 八千代台西十丁目521番24の一部	1221	248	35度 41分 54秒	140度 4分 52秒	平成24年 4 月17日 ～ 平成24年 4 月18日	6 / 50	個人住宅
かつた おおさく いせき 勝田大作遺跡 びーちてん b 地点	かつた 勝田637番 2	1221	254	35度 42分 9秒	140度 7分 33秒	平成24年 4 月20日 ～ 平成24年 5 月 9 日	280 / 2,975	宅地造成
むぎまる いせきえい ちてん 麦丸遺跡 i 地点	おおわ だ しん でん あぎむぎまる だい 大和田新田字麦丸台640番 2・14	1221	151	35度 44分 28秒	140度 6分 14秒	平成24年 5 月11日 ～ 平成24年 5 月24日	156.8 / 1,319.13	宅地造成
かわさきやまいせき 川崎山遺跡 あーちてん r 地点	かや だ あざなか だい 萱田字中台2256番22	1221	241	35度 43分 24秒	140度 6分 29秒	平成24年 6 月12日 ～ 平成24年 6 月14日	20 / 200	宅地造成
うちのみなみ いせき 内野南遺跡 えふ ちてん f 地点	よしはし あぎうち の 吉橋字内野1072	1221	289	35度 44分 8秒	140度 4分 35秒	平成24年 7 月 5 日 ～ 平成24年 8 月 8 日	1,064 / 10,790	倉庫建設
うちのみなみ いせき 内野南遺跡 じーちてん g 地点	よしはし あぎうち の 吉橋字内野1076-1, 1077-8・12, 1078-2	1221	289	35度 44分 7秒	140度 4分 40秒	平成24年 8 月10日 ～ 平成24年 8 月29日	341 / 4,428	工場建設
こいたばし いせきえふ ちてん 小板橋遺跡 f 地点	おおわ だ あぎだい たみち 大和田字台田道230-33・38の 各一部	1221	245	35度 42分 55秒	140度 6分 30秒	平成24年 9 月 4 日 ～ 平成24年 9 月10日	30 / 277.38	宅地造成
もちだ いせき 持田遺跡 でいーちてん d 地点	むらかみ あぎまつ ぼ 村上字松葉1186-3・6, 1187-8・9, 1189-1の一部, 1189-2, 1190-1, 1184-5	1221	200	35度 43分 47秒	140度 6分 59秒	平成24年 9 月 6 日 ～ 平成24年 9 月18日	100 / 1,470.14	宅地造成
しんとうぼら いせき 新東原遺跡 けーちてん k 地点	かつた あぎしんとうぼら 勝田字新東原1291-4	1221	259	35度 42分 5秒	140度 8分 19秒	平成24年11月 7 日 ～ 平成24年11月15日	78 / 777.5	宅地造成
せき ぼだい いせき 堰場台遺跡 えーちてん a 地点	おおわ だ あぎせき ぼだい 大和田字堰場台283番 1, あぎほりこめ 字堀込250番 9	1221	292	35度 42分 49秒	140度 6分 16秒	平成24年12月26日 ～ 平成25年 1 月21日	729 / 7,806.27	宅地造成
きたうらばた いせき 北裏畑遺跡 いーちてん e 地点	かや だ まち あぎかや だ みち 萱田町字萱田道798-4・6・7	1221	242	35度 43分 16秒	140度 6分 23秒	平成25年 1 月18日 ～ 平成25年 1 月25日	44 / 411	宅地造成

かみこうや しらはたい せき 上高野白幡遺跡 えーちてん a 地点	かみこうや あざしほくり 上高野字柴栗708番2・3・4	1221	222	35度 44分 32秒	140度 8分 11秒	平成25年3月14日 ～ 平成25年3月26日	450/ 6.551	太陽光 パネル設置
しんとうぼら いせき 新東原遺跡 えるちてん l 地点	かつた あざしんとうぼら 勝田字新東原1247番21	1221	259	35度 42分 7秒	140度 8分 9秒	平成25年3月18日 ～ 平成25年3月21日	30/ 335.9	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仲西遺跡 a 地点	包蔵地	奈良・平安時代	なし	なし	
勝田大作遺跡 b 地点	集落跡	奈良・平安時代	なし	奈良・平安時代土師器	
麦丸遺跡 i 地点	包蔵地	縄文時代, 古墳時代, 奈良・平安時代	近世・近代溝跡 1 条, 近・現代溝跡 1 条	縄文土器, 奈良・平安時代土師器	
川崎山遺跡 r 地点	集落跡	旧石器, 縄文, 弥生, 古墳, 奈良・平安時 代	なし	古墳時代土師器	
内野南遺跡 f 地点	包蔵地・ 集落跡	縄文時代, 奈良時代	なし	縄文土器	
内野南遺跡 g 地点	包蔵地・ 集落跡	縄文時代, 奈良時代	なし	縄文時代礫, 奈良・平安時代土師器	
小板橋遺跡 f 地点	包蔵地・ 集落跡	縄文時代, 近世	縄文時代陥穴 1 基	近世素焼土器	
持田遺跡 d 地点	集落跡	縄文時代, 古墳時代, 奈良・平安時代, 中 世	近世・近代溝跡 2 条	中近世陶磁器	
新東原遺跡 k 地点	包蔵地	縄文時代, 奈良・平安時代	なし	なし	
堰場台遺跡 a 地点	集落跡	縄文時代, 古墳時代	縄文時代堅穴住居跡 1 軒・陥 穴 1 基・土坑 4 基, 古墳時代堅穴住居跡 3 軒, 古 墳周溝 1 条	縄文土器, 古墳時代土師器	
北裏畑遺跡 e 地点	包蔵地	近世・近代	近世・近代溝跡 1 条	近世かわらけ	
上高野白幡遺跡 a 地点	包蔵地・ 集落跡	縄文時代, 弥生時代, 古墳時代, 奈良・平 安時代	なし	なし	
新東原遺跡 l 地点	包蔵地	縄文時代, 奈良・平安時代	なし	なし	

要 約	仲西遺跡 a 地点 勝田大作遺跡 b 地点	本地点は造成工事等の影響を受け、遺跡としては破壊されていることを確認した。遺構検出には至らなかったが、良好な土層と土師器を中心とした多くの遺物を確認した。付近に縄文時代や古墳時代後期、奈良・平安時代の遺構が存在している可能性を示唆する結果と評価できよう。
	麦丸遺跡 i 地点	地表面で多数の土師器片を採集したが、発掘の結果は、縄文土器が主体であった。早期条痕文の繊維土器と中期加曾利E式が出土した。遺構は近世～現代の溝跡2条が検出された。
	川崎山遺跡 r 地点 内野南遺跡 f 地点	遺物は縄文土器と土師器合計2点が出土した。遺構は検出されなかった。比較的良好的な土層を確認した。遺物は、縄文土器等を検出したが、分布は疎であった。遺構は検出されなかった。
	内野南遺跡 g 地点	縄文時代の焼礫2点が出土した。塚状・土塁状の高まりは、現代の盛土と判断した。遺構は検出されなかった。
	小坂橋遺跡 f 地点	遺構としては、縄文時代の陥穴1基と近世・近代の溝跡1条を検出した。遺物は近世の素焼土器1点であった。
	持田遺跡 d 地点	遺構は、近世～近代の溝跡2条を確認した。遺物は近世～近代の陶磁器を主体としていた。一部に中世の遺物が検出され、正覚院館跡の周辺遺跡と捉えることもできる。
	新東原遺跡 k 地点	遺構・遺物は検出されなかった。土層の観察所見として、粘土層の在り方が標準層序とは異なっていることが特筆される。
	堰場台遺跡 a 地点	攪乱は激しかったが、遺構として堅穴住居跡や堰場台古墳の周溝等を検出し、遺物として縄文土器や古墳時代の土師器を確認することができた。
	北裏畑遺跡 e 地点 上高野白幡遺跡 a 地点 新東原遺跡 l 地点	近世～近代の溝跡1条とかわらけ等を検出した。土層の遺存状態は不良で、遺構・遺物とも検出されなかった。
		遺構・遺物とも検出されなかった。

千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成 25 年度

発行日 平成 26 年 3 月 25 日
 編集・発行 八千代市教育委員会 教育総務課
 〒 276-0045 八千代市大和田 138-2
 TEL 047-483-1151
 印刷 金子印刷企画
